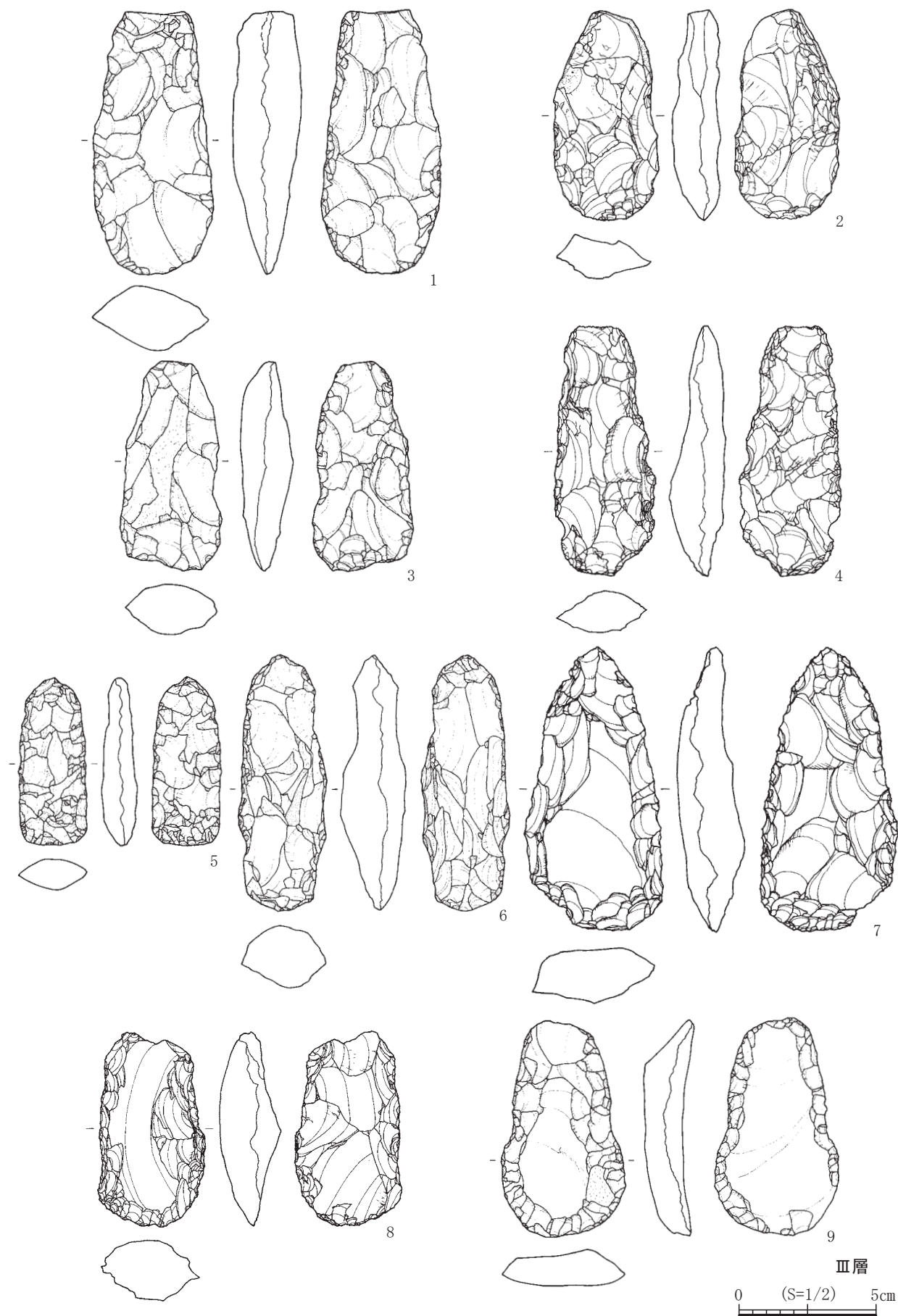
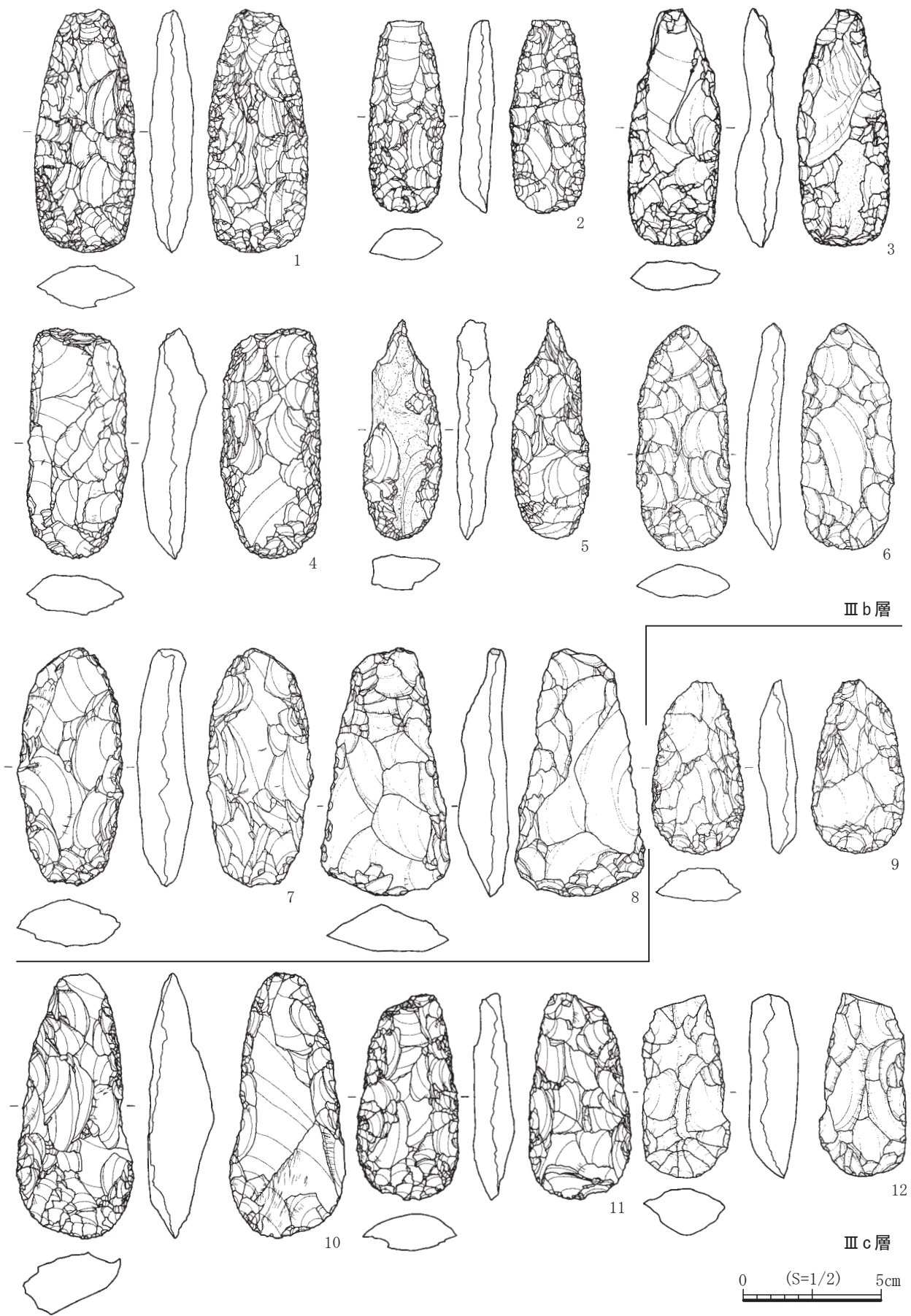


90図 北の谷出土石器 (石錐-1)



91図 北の谷出土石器 (石筥-1)



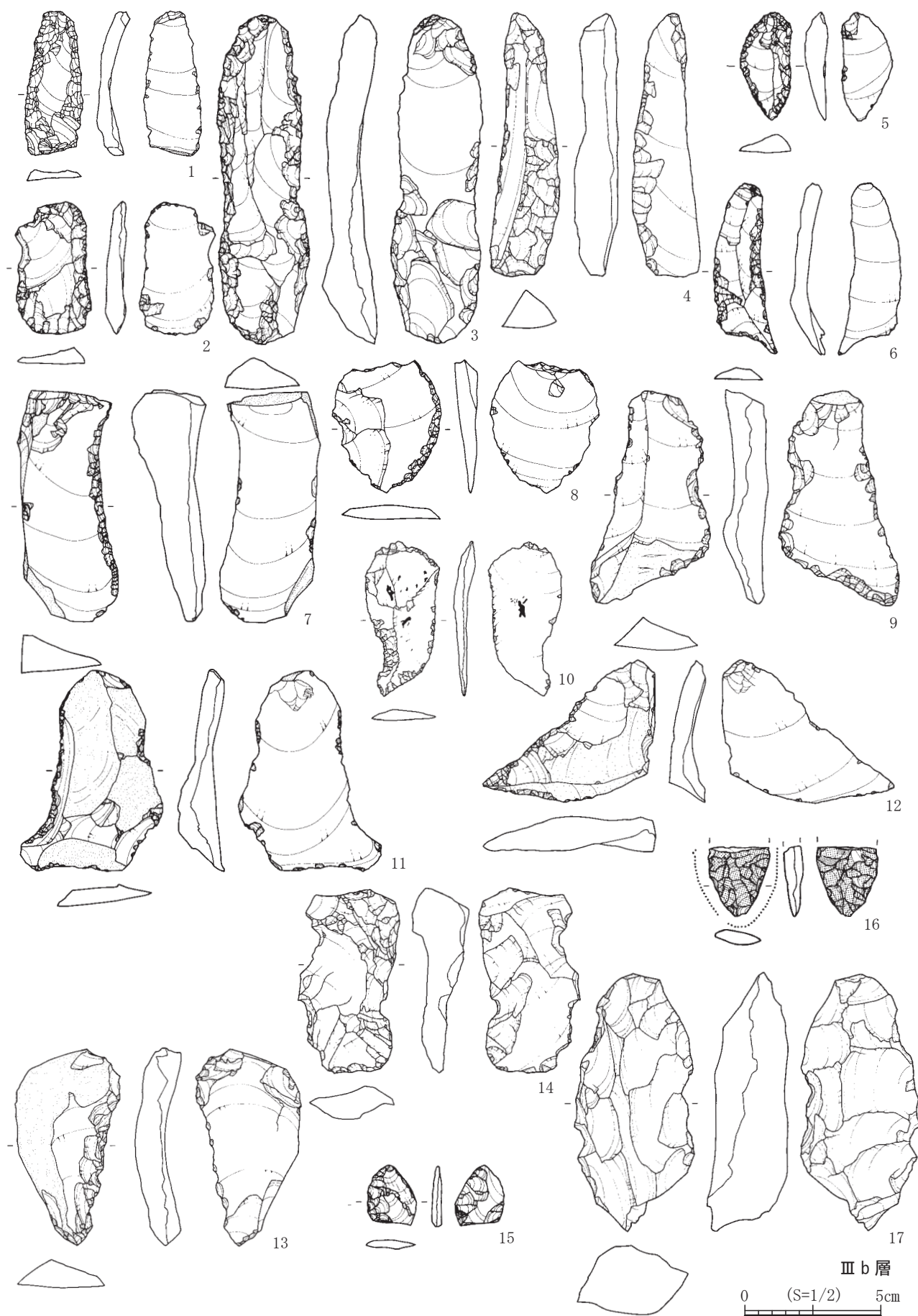
92図 北の谷出土石器 (石篋-2)



93図 北の谷出土石器（石篋-3）



94図 北の谷出土石器 (二次加工-1)



95図 北の谷出土石器 (二次加工-2)



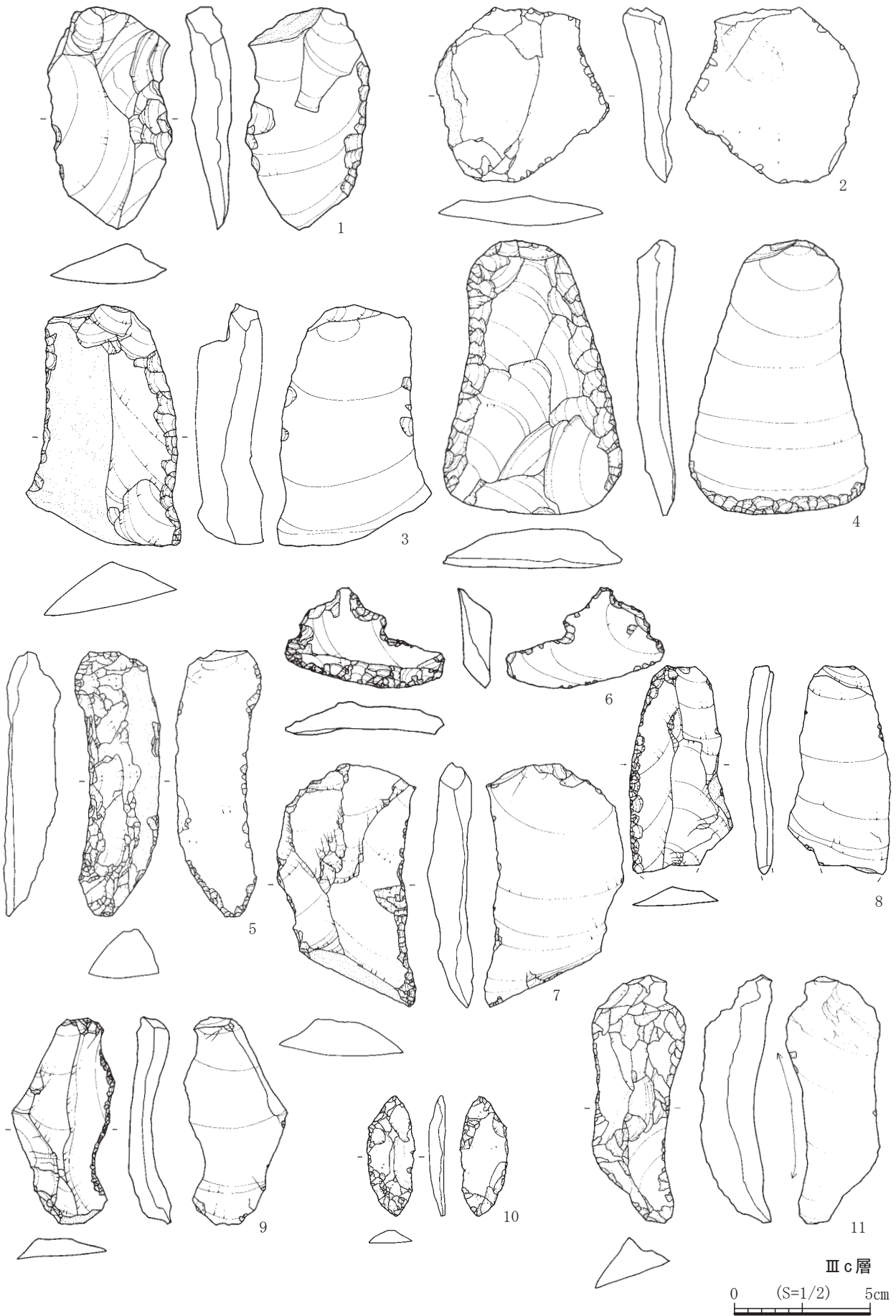
Ⅲc層

0 (S=1/2) 5cm

96図 北の谷出土石器 (二次加工-3)



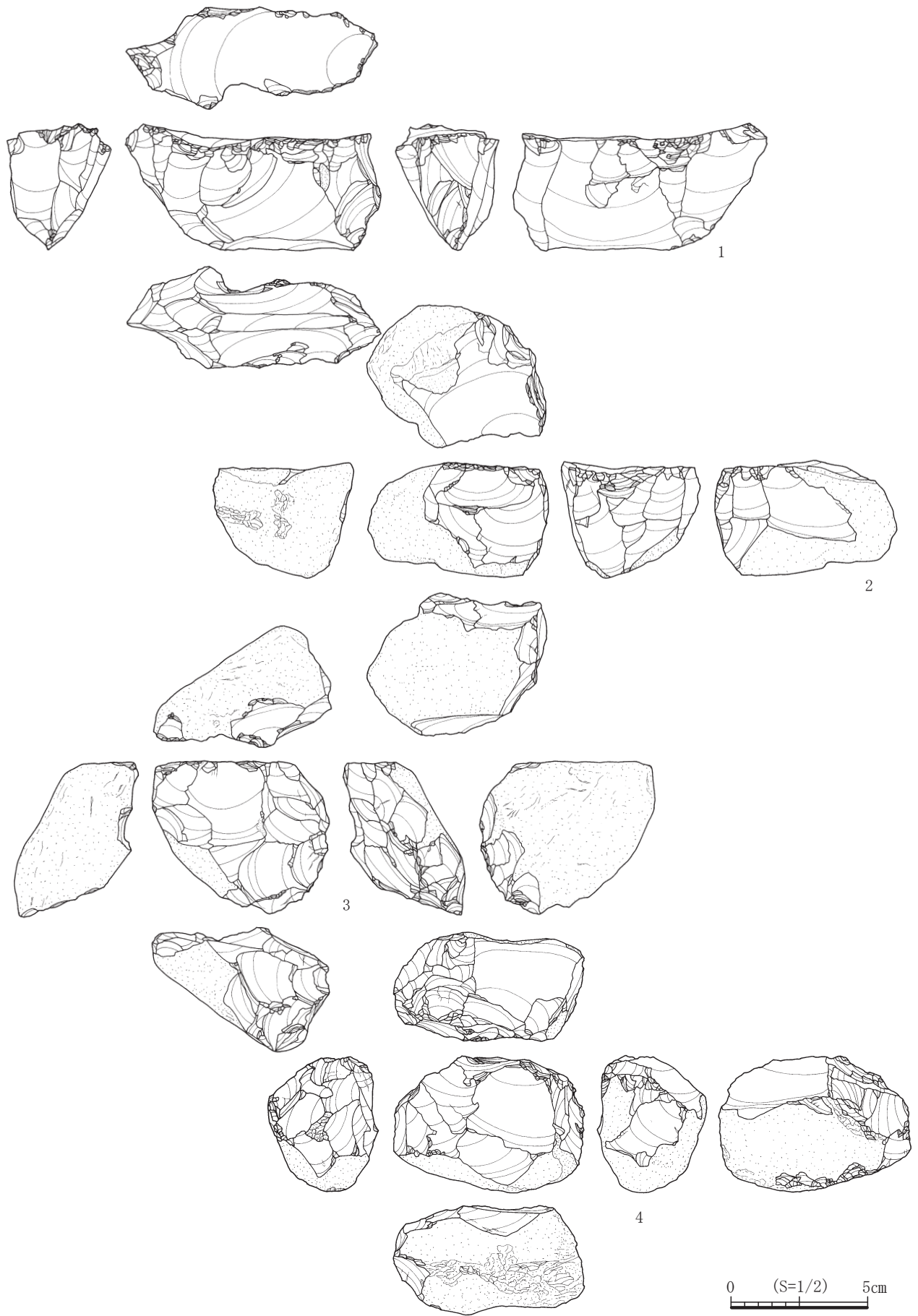
97図 北の谷出土石器 (二次加工-4)



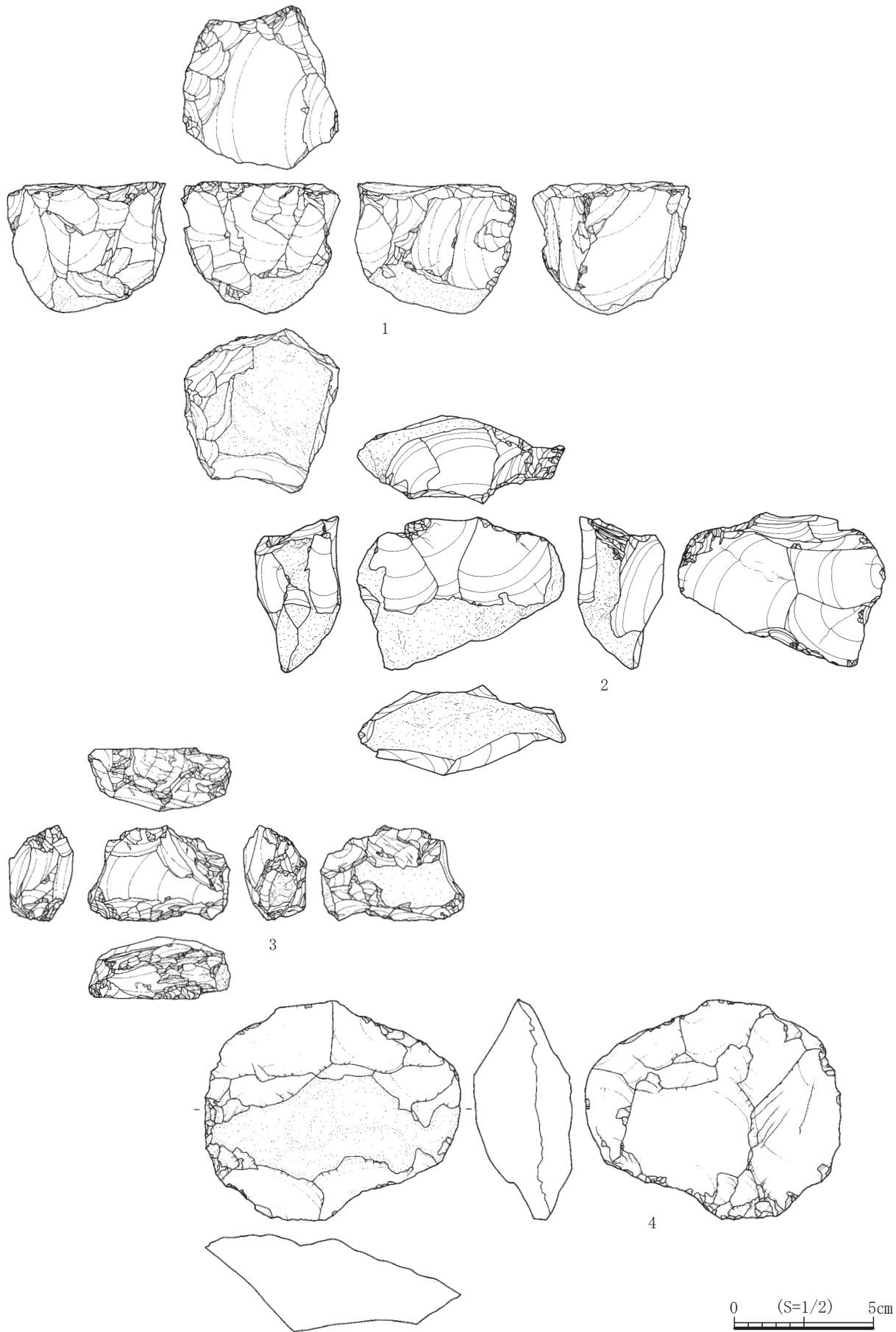
98図 北の谷出土石器（二次加工-5）



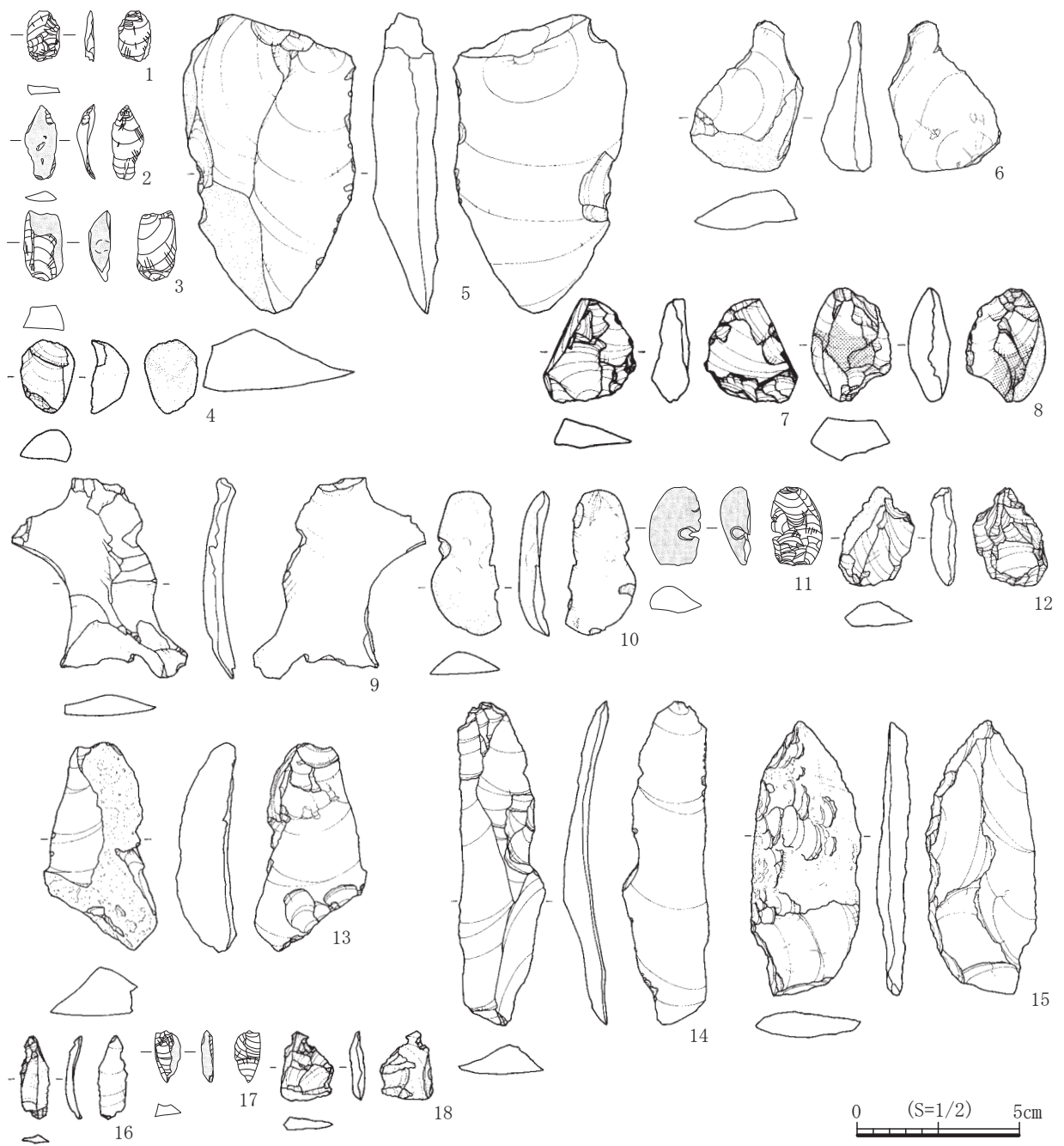
99図 北の谷出土石器 (二次加工-6)



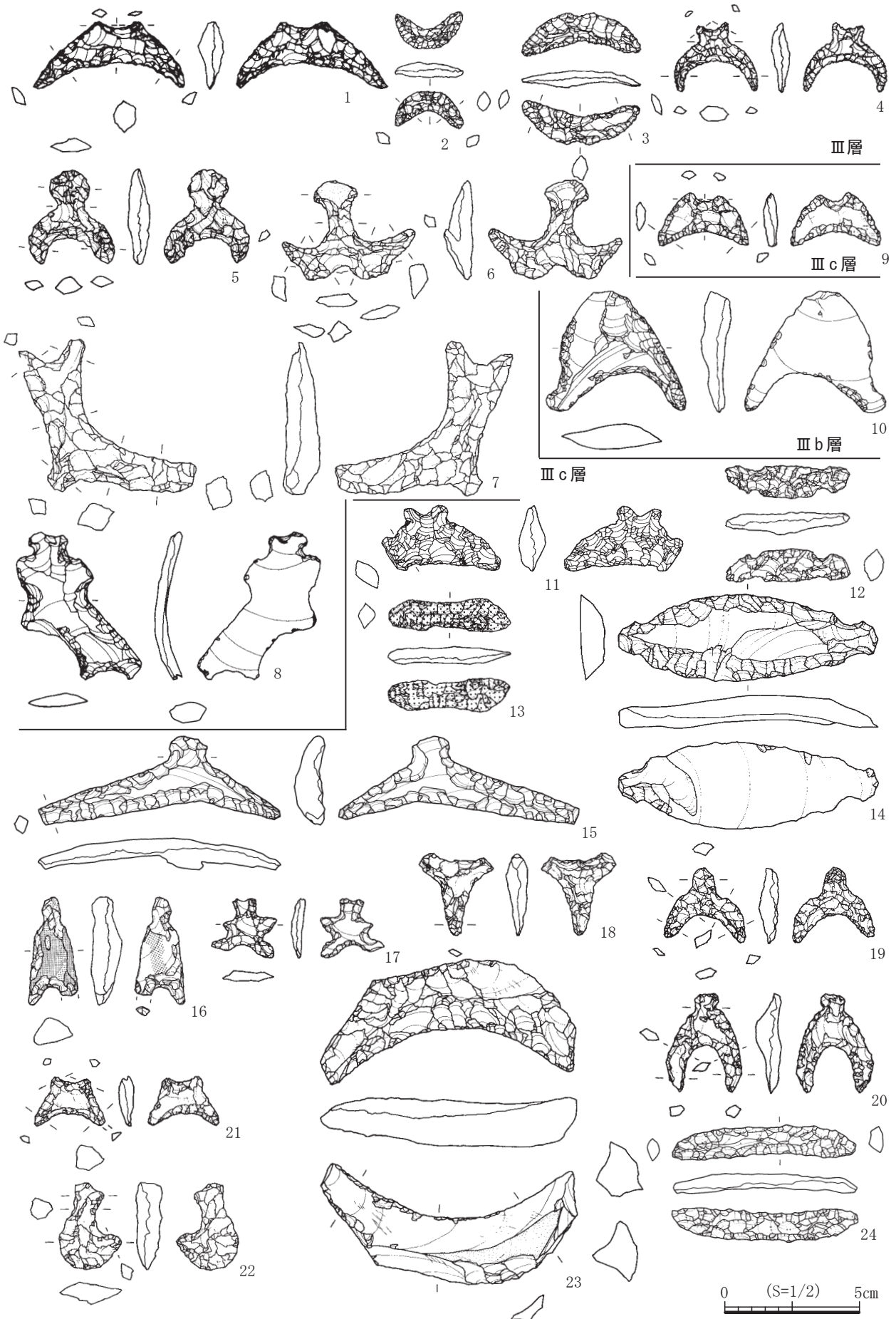
100図 北の谷出土石器（石核-1）



101図 北の谷出土石器（石核-2）



102図 北の谷出土石器（剥片類-1）



103図 北の谷出土石器（異形石器-1）



104図 北の谷出土石器（石斧-1）



105図 北の谷出土石器（石斧-2）



106図 北の谷出土石器（石斧-3）



107図 北の谷出土石器（石斧-4）

出しているもの、裏面からの調整加工で片刃の刃部を作出しているもの、刃部に素材剥片の縁辺を残しているものなどが見られる。第Ⅲc層から出土したものにはやや撥形に近い形状のものも含まれ、器体の成形加工も素材面を残すような状態のものが目立つようである。

#### G類 不定形石器（94図～99図）

素材剥片に二次的な加工が施されたものをまとめている。加工の状態により分類されている。

aにはスクレイパー類をまとめた。素材剥片の側縁に角度の浅い剥離により刃部を作出しているもの（いわゆる削器）、素材剥片の端部に急角度の剥離により片刃の刃部を作出するもの（いわゆる搔器）がある。

aは各層で出土している。削器は、第Ⅲc層出土のものがやや大きめな素材剥片を用いる特徴がある。これらは石匙などと素材を共有している可能性がある。この点は搔器にも共通している。削器に

は、刃部が直線状のものや、湾曲するもの（内湾・外湾がある）、抉りを作成しているものなどの刃部形状が見られる。

bには、素材剥片の一部に二次加工が施されたもので、aほど意図的に刃部を作成していないものなどをまとめた。この中には、cとの区別が難しいものもみられるが、一方向から規則的な調整が認められるものについては本類に分類した。

cには、剥片の一部に使用に伴う痕跡（微細な刃こぼれなど）が観察できるものをまとめた。

dには、石鏃や石槍・石筥などの未完成品と考えられるものをまとめた。北盛土や南盛土で多量に出土しているもので、両面加工品が多い。北盛土では第Ⅲa層からまとまって出土している。今回は第Ⅲc層からあまり出土が見られないことから、縄文時代中期前葉以降に出土量が増える可能性がある。

#### P類 石核類（100図～102図・133図－4）

剥片石器の素材を剥離したと考えられる残核と、素材となる原石、剥離された剥片類をまとめた。

a（残核）は8点図示した。剥離面の観察より、作業面からほぼ同一方向に剥離を行っているもの（100図－1・2）、打面を90度・180度と替えながら剥離を行っているもの（100図－3・4、101図－1～3）、側縁から求心的な剥離を行っているもの（101図－4）などが見られた。剥離された剥片の大きさは、大きくても長さ・幅が10センチを越えず、5cm程度の小さなものが主体と考えられる。また、両極打撃により剥離された残核には、頁岩製のものと黒曜石製のものが見られる。

b（原石）は図示しなかった。

c（剥片）は18点図示した。頁岩製、黒曜石製のものが見られる。133図－4はパイロクシナイト製の剥片で、本遺跡では類似した岩片を利用した装身具（玉類）が見られる。北海道日高地方に産出するものと似ていると、石質鑑定をお願いした柴正敏氏からコメントをいただいた。

#### R類 異形石器（103図）

細かな押圧剥離により完成した石器で、石鏃や錐などのような利器としての機能が推定できないものをまとめた。基本的には両面加工がみられ、左右対称形のものが多い。使用される石材には珪質頁岩・鉄石英（赤色チャート）・黒曜石・瑪瑙などが見られる。主な形状は、ブーメラン形で、頂部への摘みや突起の作出状況と、体部の湾曲具合等により見かけが変化する。摘みや突起には、2個一対で作出されるものや、石匙のように抉りが入り、摘み部が円形を呈するものなどが見られる。左右非対称のものには、左右対称形の一部に突起が作出される左右対称形が基本となるものの他、両面加工を伴わず、側縁の連続的な剥離による抉りなどで全体形が作出されるものがある。これらは、石匙や削器などとの区別が難しいものもある。使用される石材には珪質頁岩が多い。

#### H類 石斧（104図～107図）

aには、器体のほぼ全面が研磨により完成された磨製石斧をまとめた。素材礫には緑色岩・（花崗）閃緑岩が大半を占めている。緑色岩製のものは、各層から出土しているが、花崗閃緑岩製のものは、第Ⅲ・Ⅲa層から出土しており、第Ⅲc層からの出土は極端に少ない。刃部の形状は数種類見られる。

主に断面形状に着目すると、両刃のもの、片刃のものが見られ、両刃のものには器体の厚さが厚いものと薄いものが見られる。片刃のものは薄いもののみである。片刃のものは緑色岩が大半を占めており、用途による素材の使い分けの結果と考えられる。刃部の正面形状には、弧状・平坦・狭まるものが見られ、両刃の厚いものには弧状で偏った刃部のものが見られる。

bは3点掲載している。104図-14は花崗閃緑岩製で、扁平な楕円礫の片面側からの加工により、刃部と側縁を作出している。裏面には素材礫面を大きく残している。このタイプの石斧は縄文時代早期末や中期後半期などに、本県太平洋側に見られる。105図-1は素材の礫に粗い加工を施し両面体にしたものである。一部分に敲打の痕跡が認められるため、敲打整形により石斧へ加工する途中の状態であると考えられる。107図-9は扁平な頁岩製の礫端部に表裏両面から剥離を施し、刃部を形成している。刃部以外は素材礫面をそのまま残している。

### I類 敲磨器類 (108図～118図-2)

器体の一部に使用に伴う敲打による凹み・平坦面などが観察されるものをまとめた。

Ia (いわゆる凹み石)には、器体の表面・裏面・側面などに敲打等による円形や楕円形の凹みや器面の荒れが見られるものをまとめた。多くは楕円形の扁平な礫を素材としており、安山岩・流紋岩・デイサイト・頁岩などの石質が見られる。110図には、凹みの周囲に擦痕がともなうものをまとめて掲載した。凝灰岩などの柔らかい石質が多く、特に第Ⅲc・Ⅲb層出土品には白色系の素材礫が用いられているものが多い。擦痕と凹みの新旧については、凹みの方が後と判断した。これらは砥石などに使用された礫を凹み石として再利用した結果と考えられる。

Ib (いわゆる敲き石)には、器体の端部付近に使用に伴う敲打による器面の荒れが狭い範囲に見られるものをまとめた。安山岩・デイサイト・流紋岩・頁岩などの他、石英や玉随などの石質も見られる。敲打痕は、器体長軸先端部、器体長軸端部側面等に狭い範囲で見られるが、112図-5のように、器体側面に帯状に見られる場合や、113図-4～5のように、器体中央部に広い範囲で平坦な敲打面が見られるものもある。また、113図-6のように長軸端部の広い範囲に、稜線を伴って分布するものは、多面体の敲き石と呼ばれるものである。

Ic (いわゆるすり石)には器体長辺の側縁に敲打による平坦・帯状の使用痕が見られるものと、礫面の一部に研磨によると思われる平坦面が見られるものをまとめた。安山岩・流紋岩・デイサイトなどの楕円形で扁平な礫を素材とし、その長辺を使用している。使用痕の状態には、使用痕に剥離が伴わないもの、小規模な剥離が伴うもの、剥離が伴い、使用面が断続的なもの、剥離を伴い使用面が稜線状のもの等が見られる。Icは北の谷からは100個以上出土しているが、6割程度が折れている。折れ面を観察すると、表裏面側からの打撃により折れている例が多数見受けられるため、使用中に使用面からの打撃で折れたものの他、意図的な破壊により折れたものも多数あった可能性がある。また、折れ面には主に使用面側に摩耗した部分が見られることがある。使用面と反対側の側縁は、剥離や敲打により整形されているものと、加工が施されず礫面が残されているものがある。短辺は敲打や剥離により弱い抉りが作出されるものもあり、使用時に石器を保持するために紐などをかけていた可能性がある。一方、研磨による平坦面が見られるものは、厚みのある円礫や楕円礫を用いている場合が多い。

#### J類 半円状扁平打製石器（118図－3～120図－2）

板状に割れる安山岩などを素材とし、長辺の片側縁を直線状に、もう一方の側縁を弧状に仕上げた石器で、円筒土器文化に固有の石器と理解されている。直線状の側縁に敲打による使用痕跡が見られる。使用痕は、剥離を伴い稜線状に見えるものと剥離を伴い使用に伴う平坦面が断続的に続くものが見られる。J類については正面形状に差異が見られ、半円状のもの、短冊形のもの、楕円形のもの、直角三角形に近いもの等が見られる。各形状ともに、器体の一部分が研磨されているものが見られるなど、K類との類似点が多い石器である。また、折損の多い石器でもあり、全体の約5～6割が折損している。折損部の特徴はI類cと類似している。

#### K類 抉入扁平磨製石器（120図－3～123図－2）

安山岩・デイサイトなどの扁平な礫を素材とし、剥離と研磨により正面形を直角三角形に整形した石器で、短辺に抉りが施される。円筒土器文化圏において、特に日本海側に分布の多い石器と考えられる。K類の使用痕跡には一番長い側縁に見られる敲打痕と、抉り部付近に見られる光沢がある。側縁に見られる使用痕は、敲打痕が見られないか、鈍い光沢と器面の弱い荒れだけが見られるもの。剥離を伴わず、細く平らな使用面を持つもの。剥離を伴い、平坦面を持つもの。剥離を伴い、平坦面が断続的に見られるもの等が見られる。これらは、使用痕跡の進行過程を表していると考えられる。抉り部付近には、帯状の光沢や変色域がみられることがある。これは、使用時に抉り部に紐を引っかけて器体を保持したため、紐と器体がこすれて生じたと考えられている。

また、K類もI cやJ類と同様折損率が高く約5～6割程度である。折れ面における加撃方向も同様であり、意図的に割られたものも相当数あると考えられる。

#### L類 石皿（123図－3～124図）

扁平で大型の礫表面に使用による研磨が見られるものをまとめた。使用面の状況には、器体中央部分に向かって緩やかにへこむもの、側縁に縁が作出されるもの、全体に平坦なものなどが見られる。縁付きのものは主に北盛土の第Ⅲa層から出土しており、中期に帰属するものと考えられる。

#### M類 石棒類（125図・126図）

いわゆる石棒と石刀をまとめた。安山岩・デイサイトなどを主な素材としている。

石棒（125図－1～4）については、棒状の自然礫をそのまま用いたものや、敲打及び研磨による加工が施され、端部に平坦面や凹みが作出される「端部彫刻型石棒」などが見られる。石刀（125図－5～126図）には、棒状の礫を敲打・研磨で加工し、刃部を作出したものが見られる。粘板岩などの薄く板状に割れる礫を素材とし、丁寧に研磨がなされるものや、やや厚みのある礫を用い、刃部の断面が涙型になるように整形したものなどがある。本遺跡では、後者が縄文時代前期末～中期中葉頃まで見られるようである。これらは円筒土器文化に特有の石刀である可能性が高い。

#### N類 石錘（127図－1～6）

扁平な楕円礫の端部に剥離による抉りが施されるもので、抉りの入る位置には長軸両端部、長軸と

単軸の端部それぞれに入るものなどがある。

#### ○類 石冠 (127図-7~128図-3)

a は三角柱状もしくは斧状の突出部を持つ磨製石器である。128図-2 は破損品で被熱している。実測図正面には直径約3.5cmのボタン状の突起が作出されている。

b の北海道式石冠に類するものは2点図示した。器体中央部に帯状に敲打痕が巡るのが特徴で、使用面も幅広である。

#### S類 砥石 (128図~131図)

器体の一部に何かを研いだ痕跡が残るものをまとめた。素材の形状などにより3つに分類される。

a は楕円礫の一部に明瞭な擦痕や使用面が見られるものである。使用面の状況により、さらに2細分される。a-1 は頁岩などの小型礫の端部に摩耗が見られるもので、手に持って何かを磨くまたは研ぎ出すのに使用されたと考えられる (128図-5~129図-5)。主に第Ⅲc層と細分層から出土している。a-2 は器体中央部に砥面を持つもので、細く溝状の砥面を複数持つものや、中央部が緩やかにへこむものなどが見られる (129図-6~130図-5)。

b はやや大型品で、中央付近に緩やかな凹みや溝状の砥面を持つ (130図-6~131図)。主に磨製石斧などを研いだものと考えられる。厚さ1cm程度まで薄くなるまで使用されているものもあり、日常的に使用されたものと考えられる。

#### U類 角柱状礫

太さ約5cmほどの安山岩製角柱状礫が238点出土している。長さ10cmほどに割れているものが多い。石器などに使用されたものについては各分類の中へ含めたので、未使用のものについては今回は図示しなかった。

#### V類 擦切具 (132図~133図-3)

板状の礫片の側縁に石などを擦り切った際の使用痕跡が残るものである。安山岩や凝灰岩の板状素材が用いられている。使用面の断面形には、U字状に丸みを帯びるもの、角張るものなどがある。また、刃部の正面形も直線状や湾曲するものが見られる。本遺跡では、磨製石斧に擦り切り痕跡が見られるため、磨製石斧を加工する作業等に使用されていた可能性が高い。

133図-2・3 はやや鋭利な礫素材の縁辺部に擦痕とにぶい光沢が見られるものである。133図-2 は包丁形石器と発掘当初紹介されていたもので、出土地不明 (北の谷出土) だが参考品として掲載した。柄の部分を二次加工により作出し、刃部には加工が見られない。刃部には、摩耗による光沢と擦痕がみられる。擦痕は刃部縁辺と直行する。133図-3 も同様の使用痕跡を持つ。この個体には柄の作出は見られず、欠損部を除くほぼ全周に摩耗による光沢と擦痕が見られる。 (茅野嘉雄)



108図 北の谷出土石器（礫石器-1）



109図 北の谷出土石器（礫石器-2）



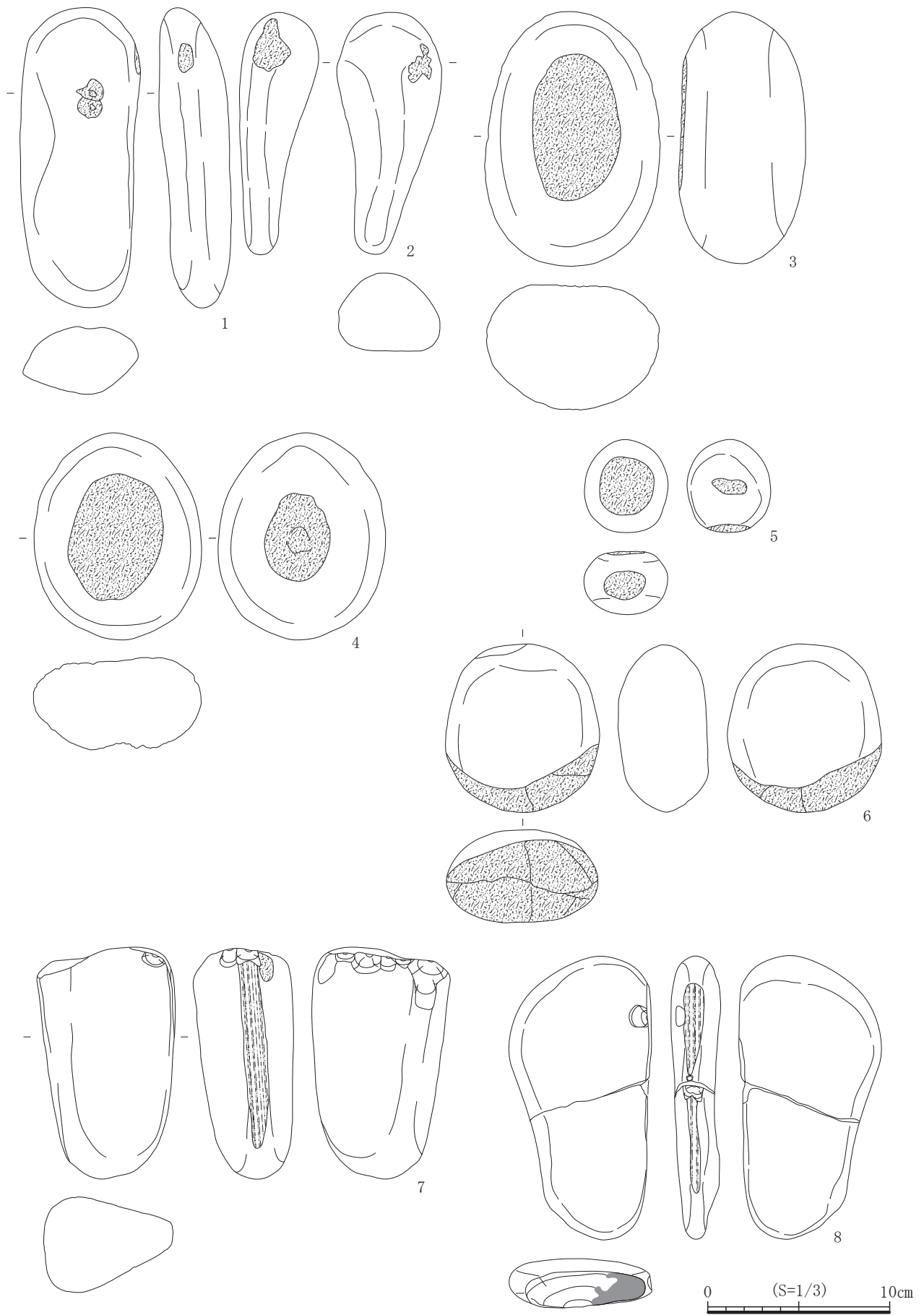
110図 北の谷出土石器 (礫石器- 3)



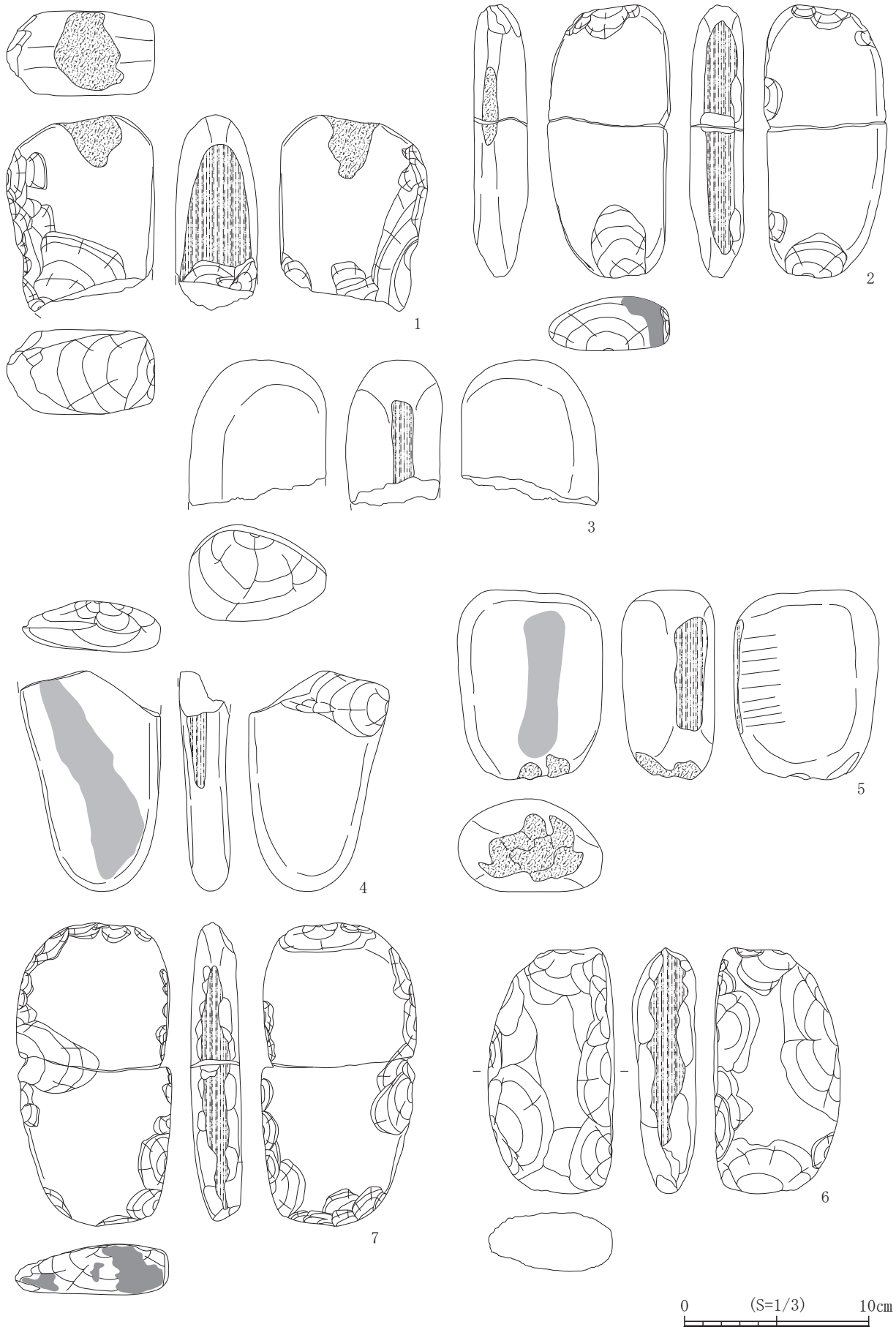
111図 北の谷出土石器（礫石器-4）



112図 北の谷出土石器（礫石器-5）



113図 北の谷出土石器（礫石器-6）



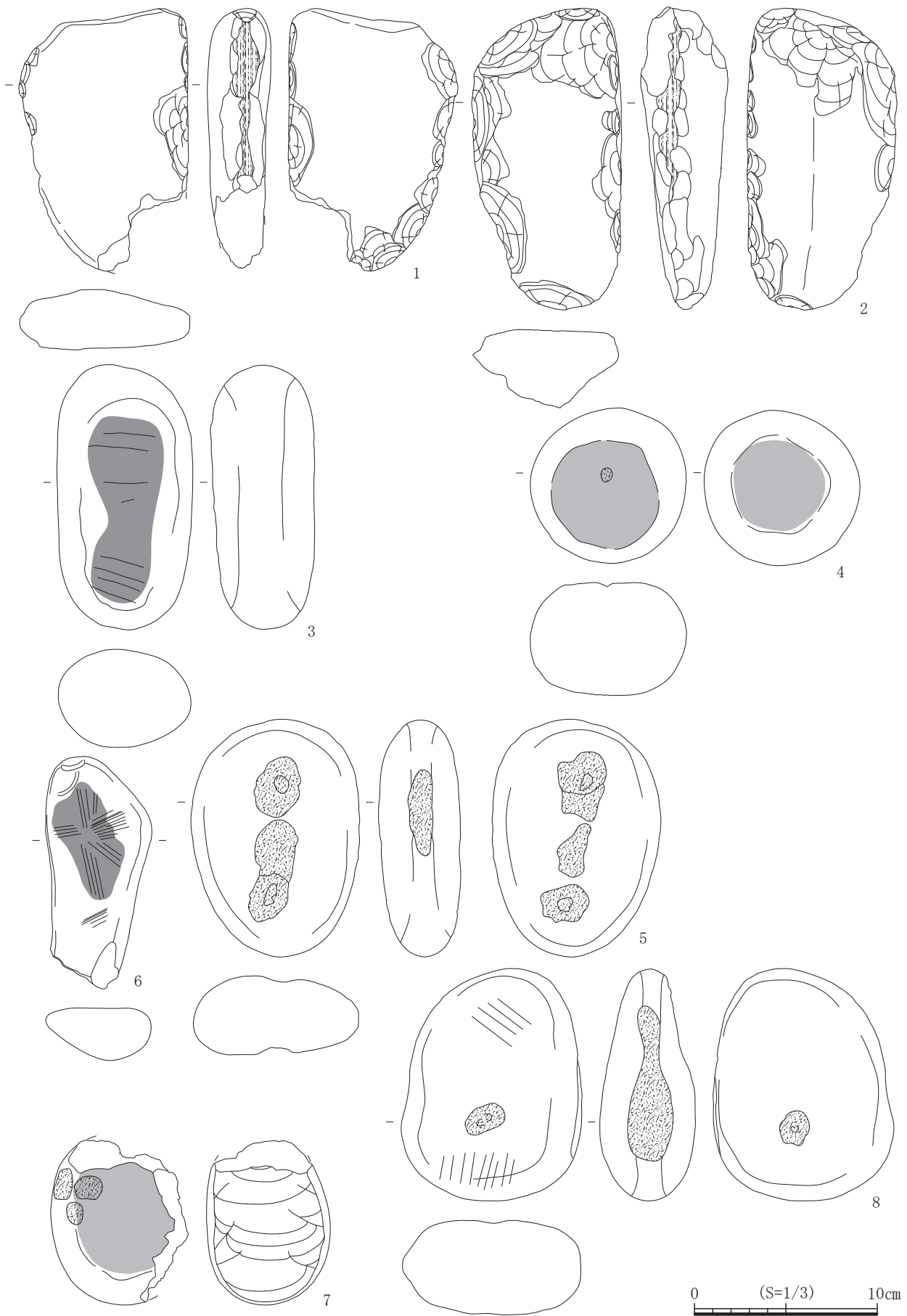
114図 北の谷出土石器 (礫石器-7)



115図 北の谷出土石器（礫石器-8）



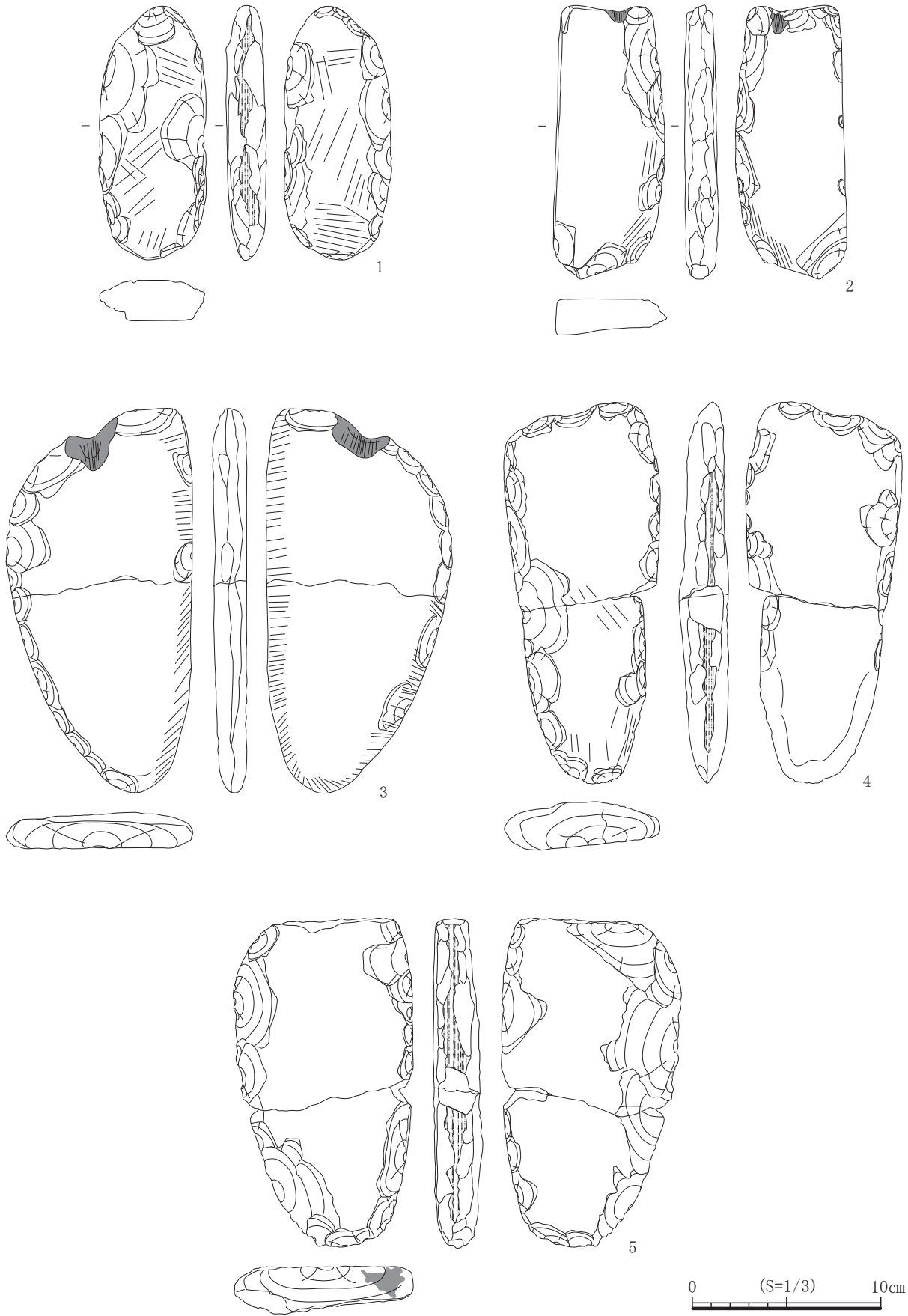
116図 北の谷出土石器 (礫石器-9)



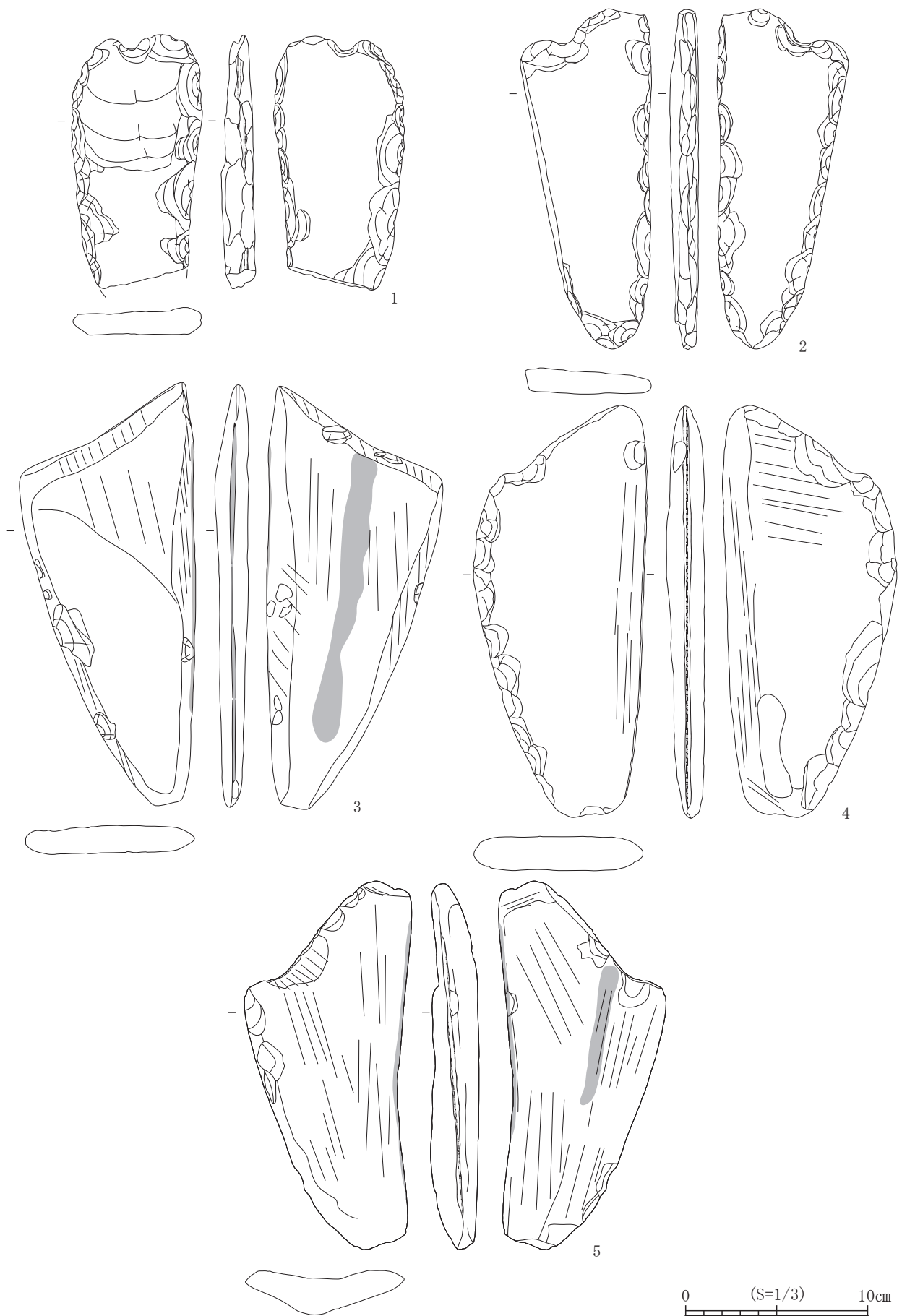
117図 北の谷出土石器 (礫石器-10)



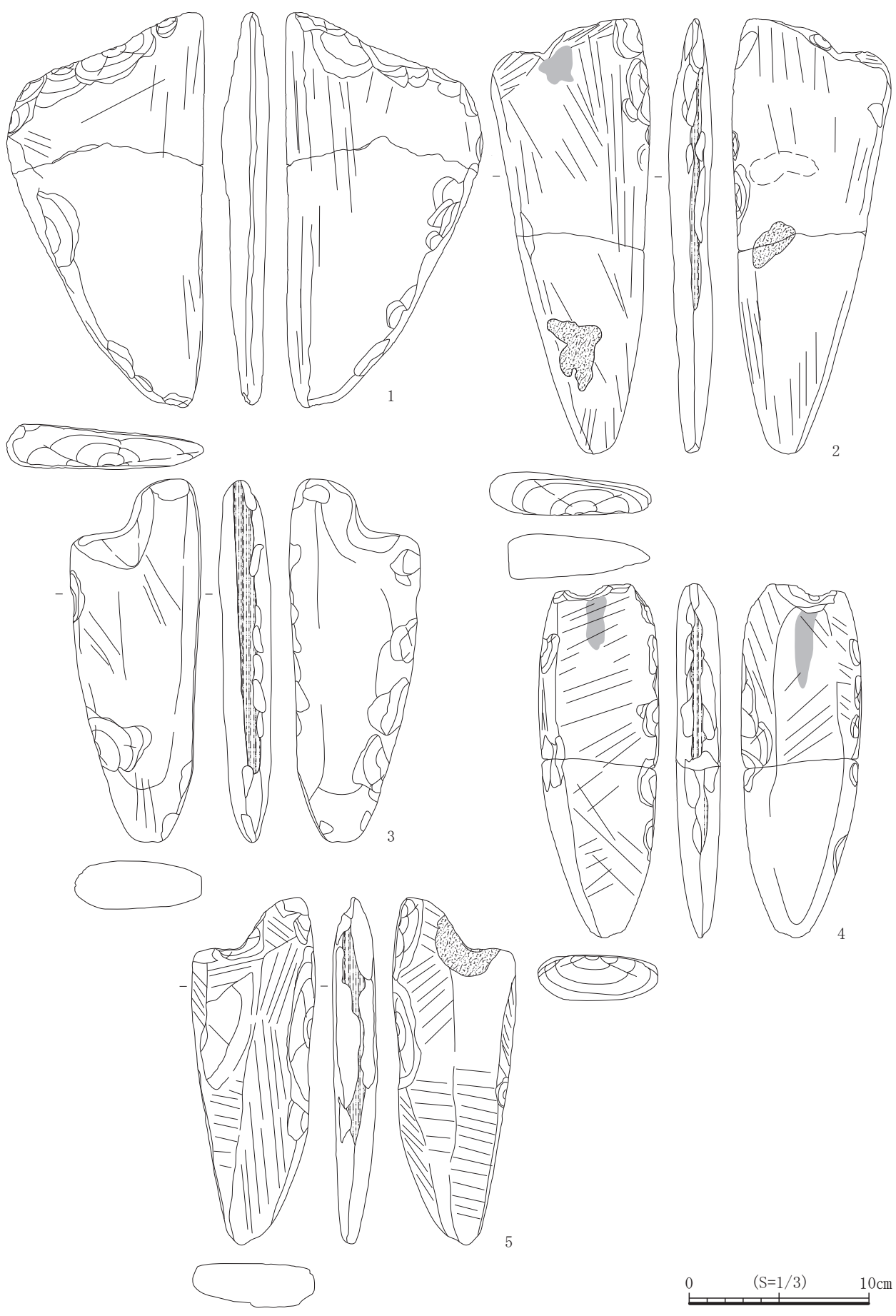
118図 北の谷出土石器（礫石器-11）



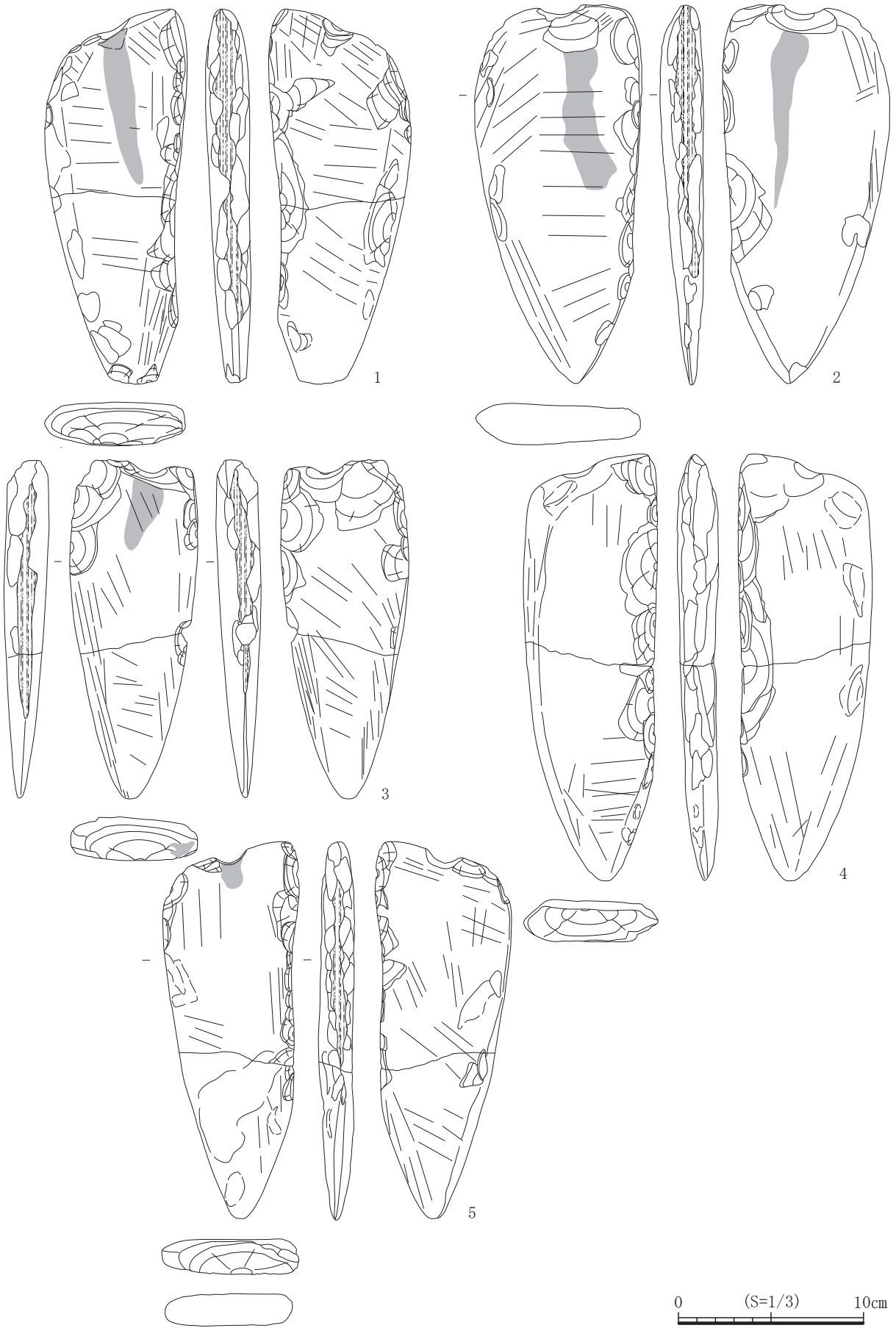
119図 北の谷出土石器 (礫石器-12)



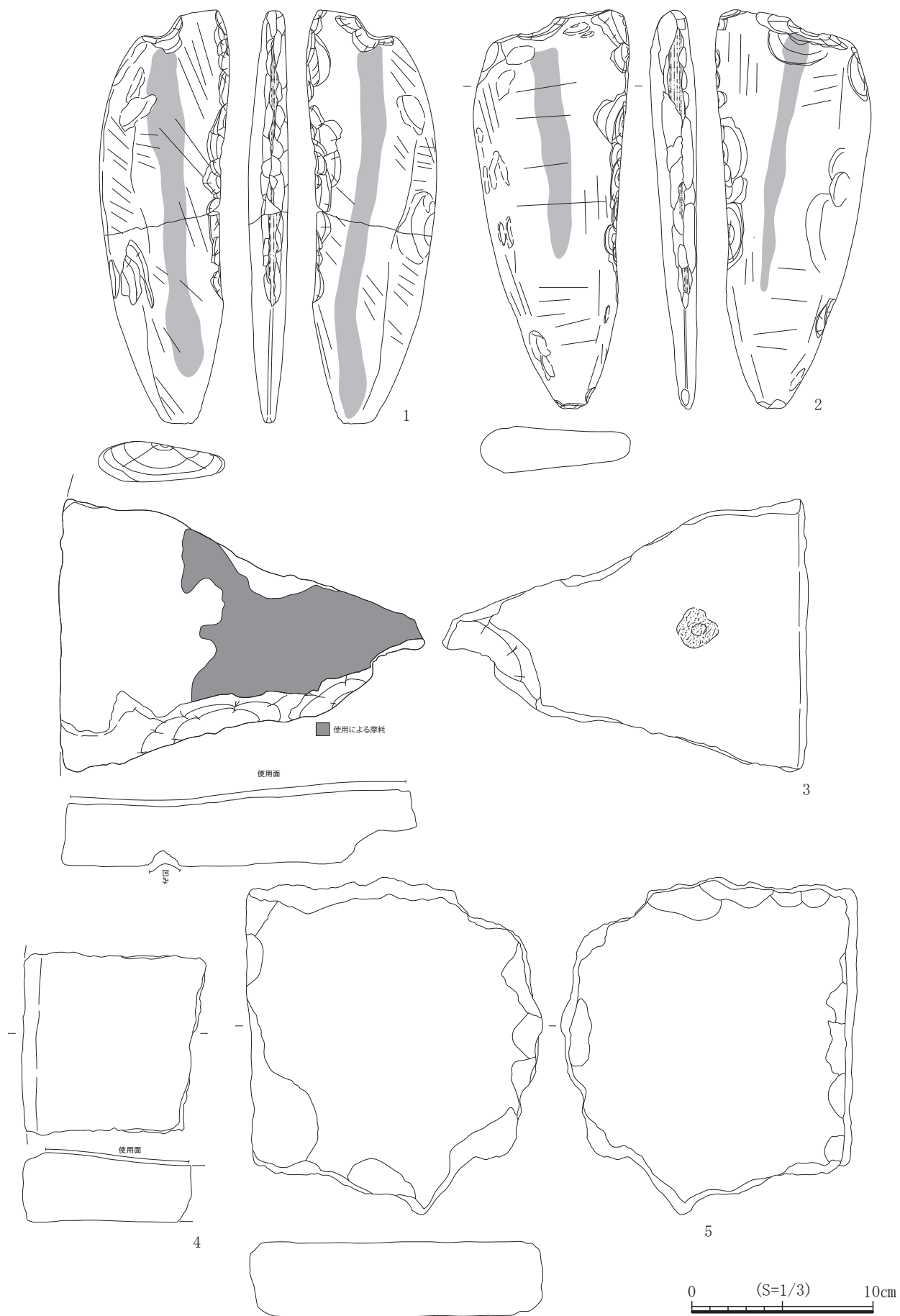
120図 北の谷出土石器 (礫石器-13)



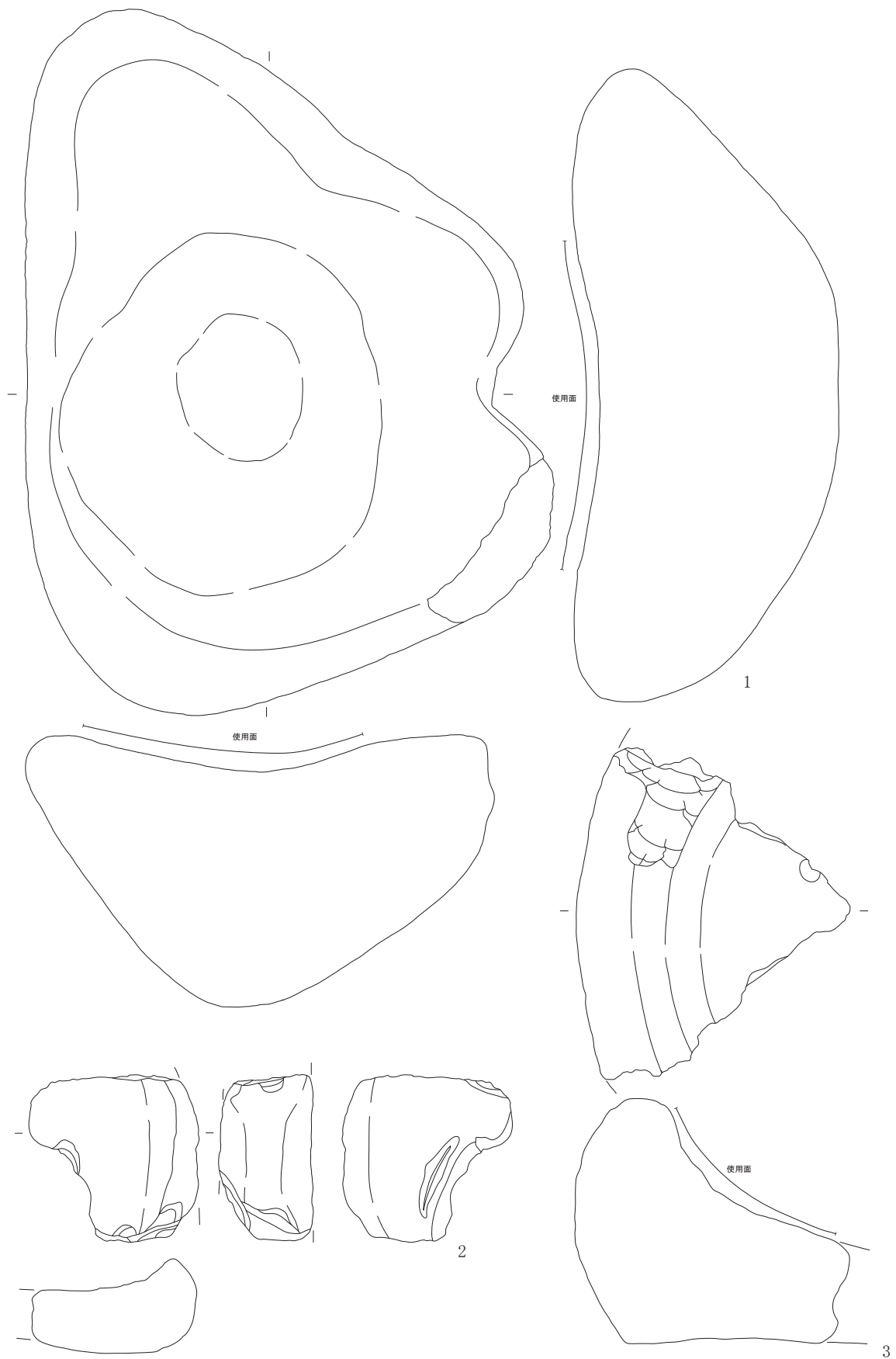
121図 北の谷出土石器 (礫石器-14)



122図 北の谷出土石器 (礫石器-15)



123図 北の谷出土石器（礫石器-16）

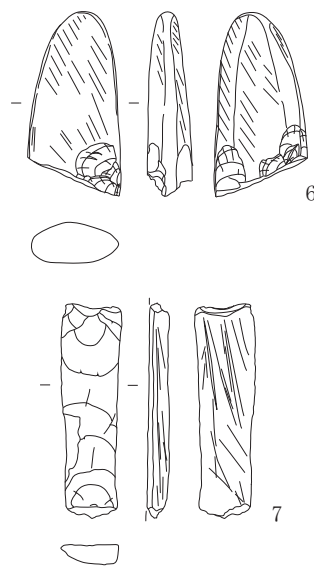
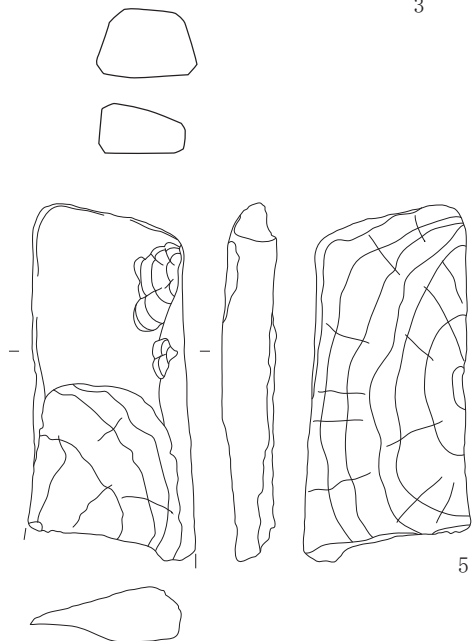
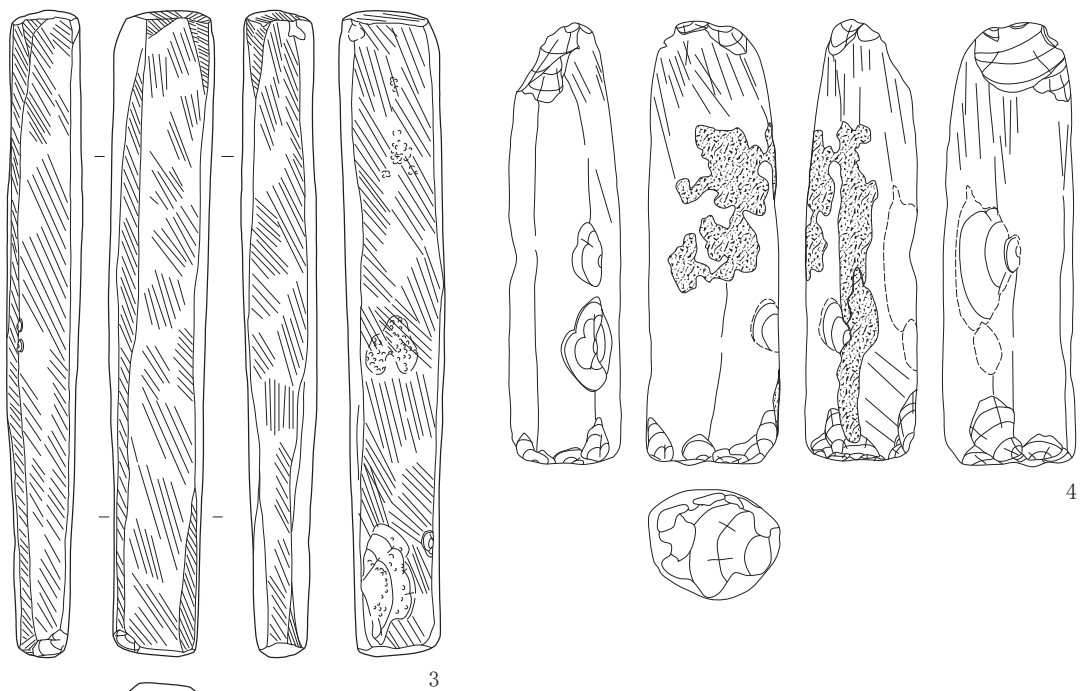
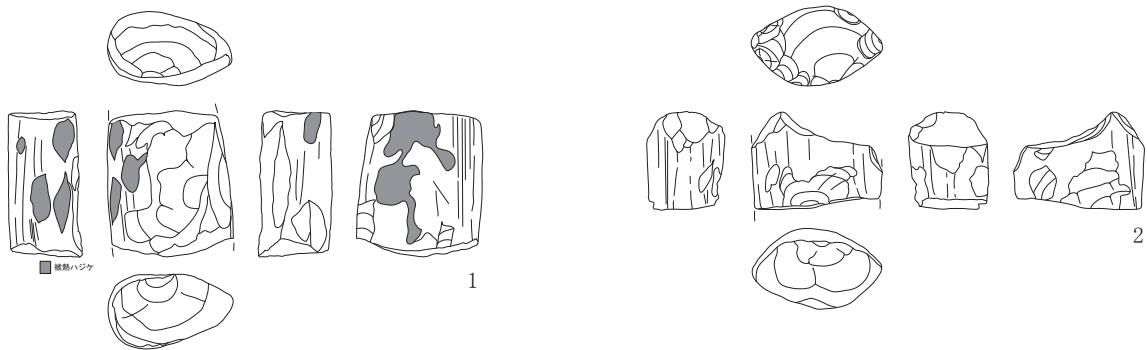


0 (S=1/3) 10cm

124図 北の谷出土石器 (礫石器-17)

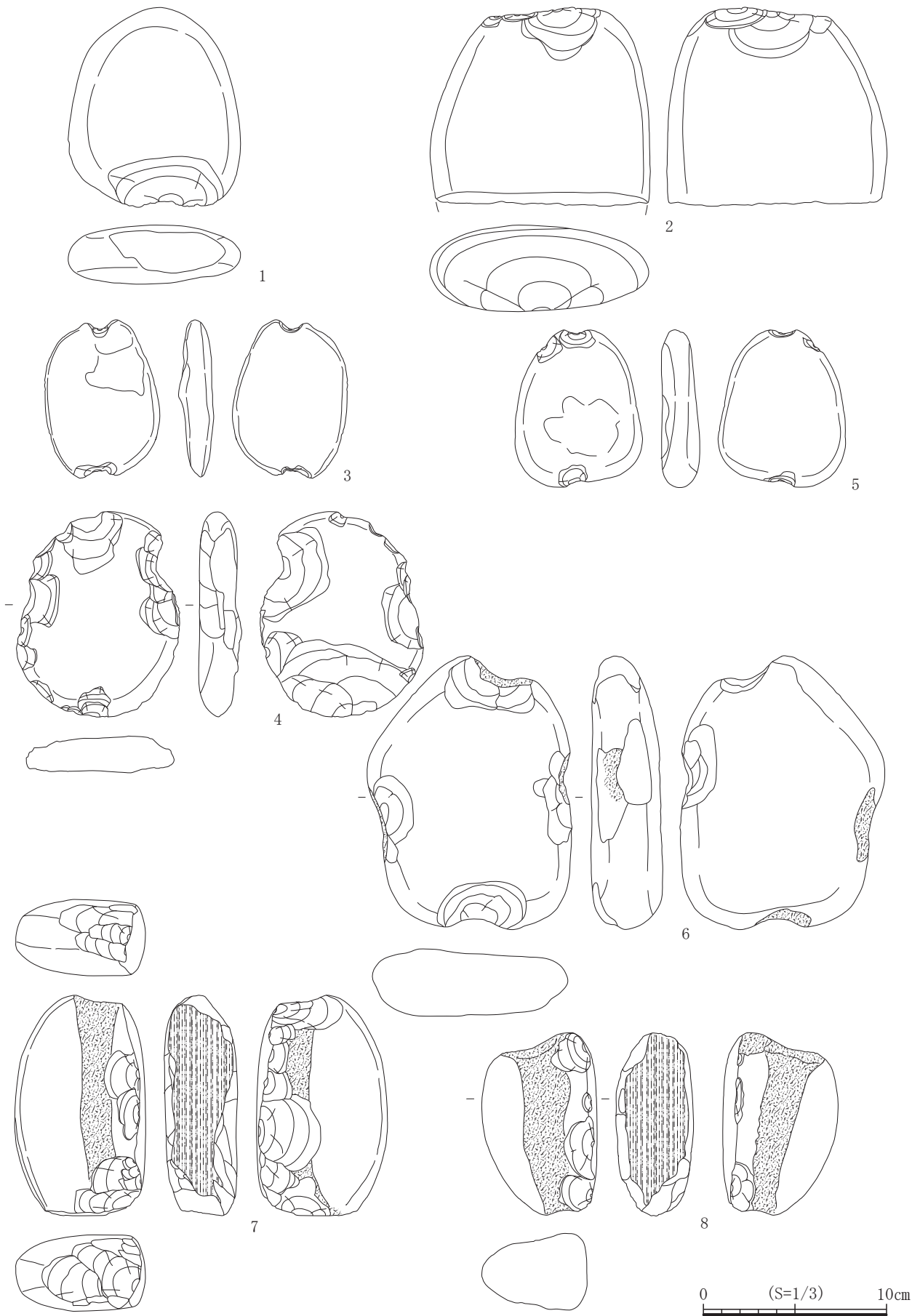


125図 北の谷出土石器 (礫石器-18)

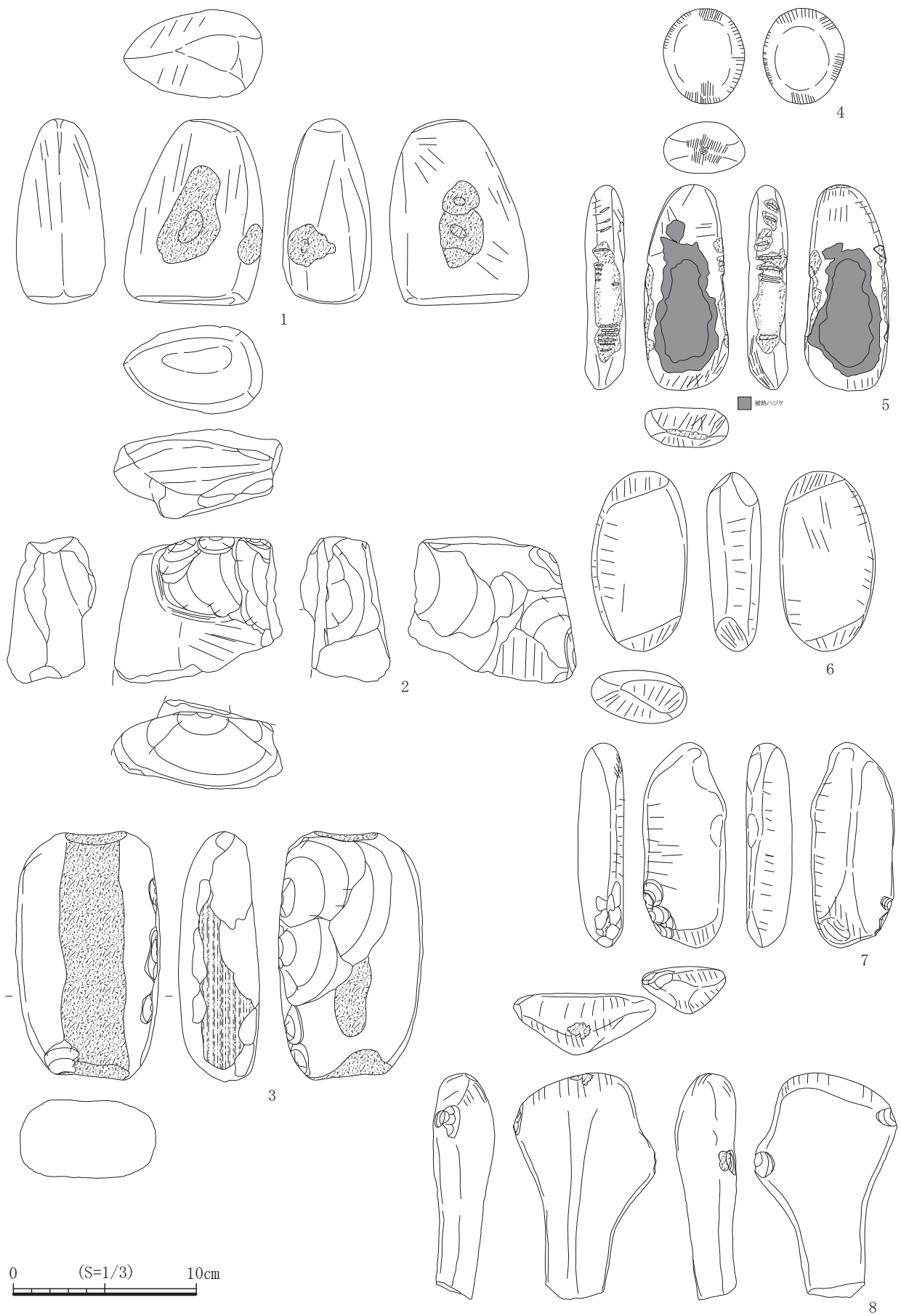


0 (S=1/3) 10cm

126図 北の谷出土石器 (礫石器-19)



127図 北の谷出土石器 (礫石器-20)



128図 北の谷出土石器 (礫石器-21)

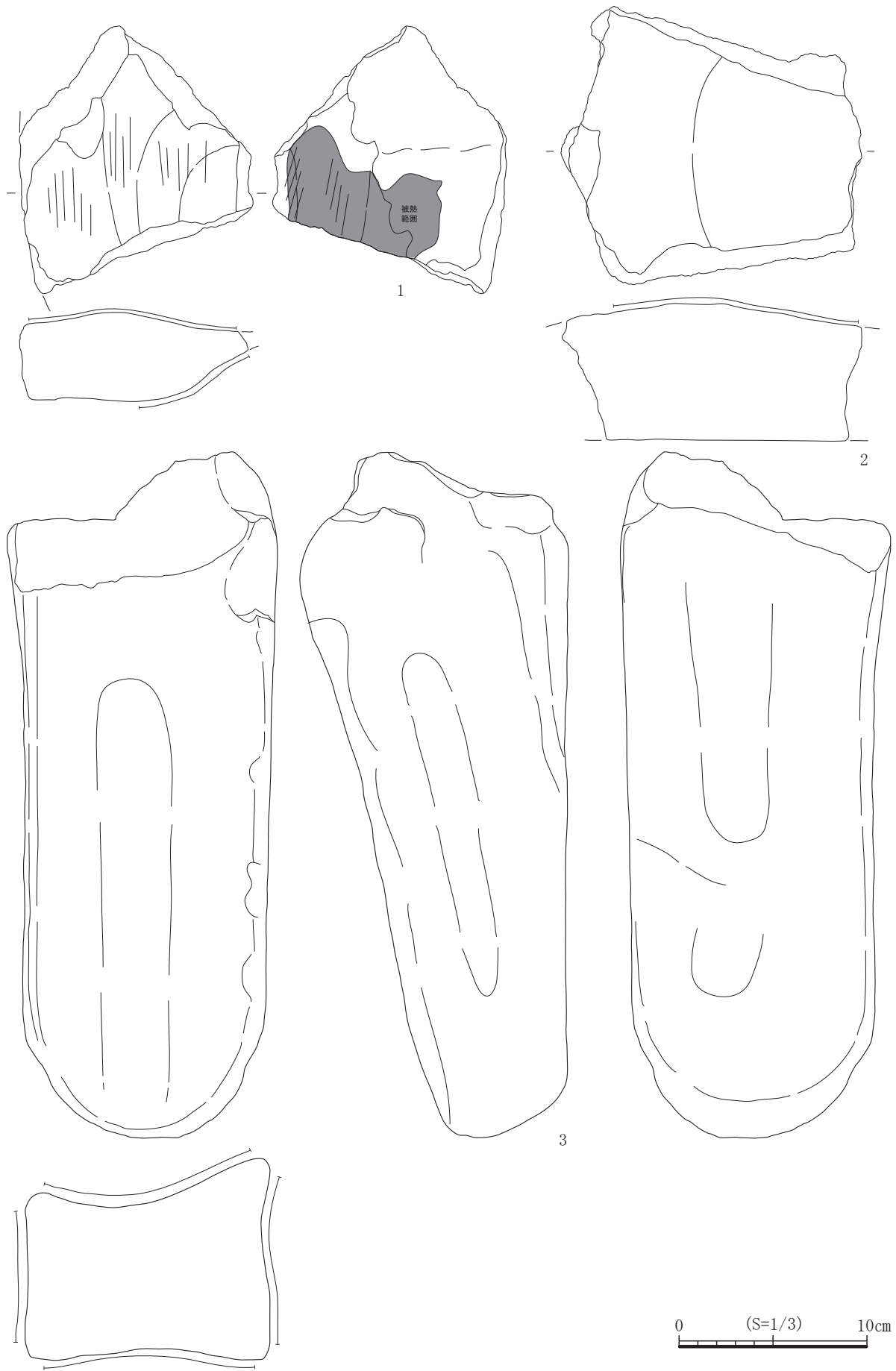


129図 北の谷出土石器 (礫石器-22)

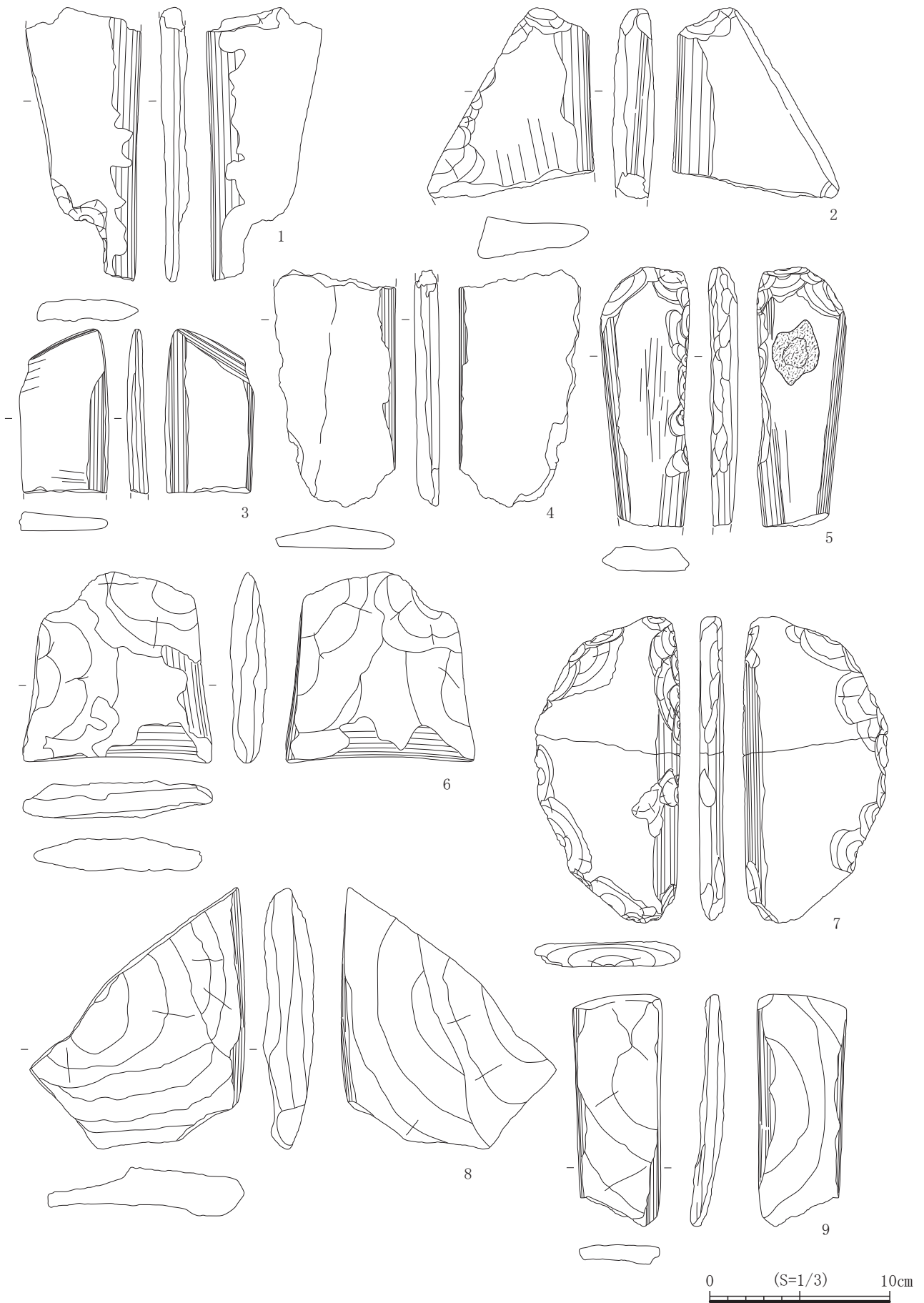
0 (S=1/3) 10cm



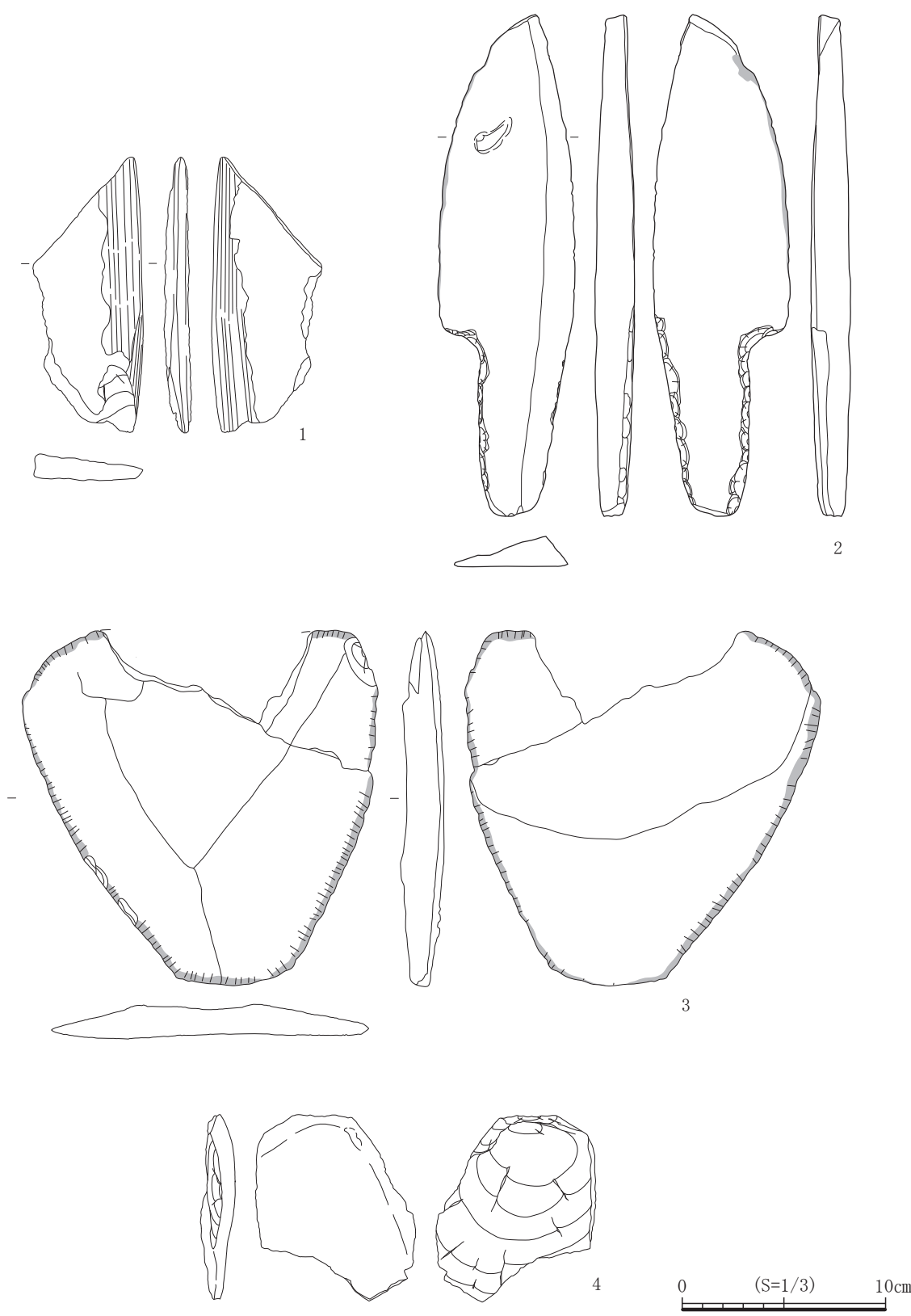
130図 北の谷出土石器 (礫石器-23)



131図 北の谷出土石器 (礫石器-24)



132図 北の谷出土石器（礫石器-25）



133図 北の谷出土石器 (礫石器-26)

### (3) 土偶

個体数で98点が出土しており、全点掲載した。

北の谷における各層の出土点数は、第Ⅲ層から32点、第Ⅲ a 層から6点、第Ⅲ b 層から8点、第Ⅲ c 層から23点、第Ⅲ c - 2 層から3点、第Ⅲ c - 3 層から1点、第Ⅲ c - 4 層から3点、第Ⅱ・Ⅲ層から19点、第Ⅱ層から1点、第Ⅱ c 層から1点出土している。詳細な層位ごとの分析は来年度刊行の『北の谷2』で掲載する予定である。

以下、既報告書で行われている分類にしたがって記述する。

#### A類 細沈線が施されたもの (134～135図)

第Ⅲ層から4点、第Ⅲ b 層から5点、第Ⅲ c 層から2点、第Ⅲ c - 4層から1点、第Ⅱ・Ⅲ層から3点、第Ⅱ層から1点出土している。

篋状の工具を用いて連続的に刺突を加え、体部に短沈線で複雑な文様が表現される。沈線上に連続的に短沈線、矢羽根状、渦巻状などが表現されるものが特徴的である。ジグザグの沈線を組み合わせで連続した菱形を表現するものもある (135図1)。

完形品はないが、全体形は腕が体部上位に位置し、水平にあまり突出しない逆三角形が多い。

#### B類 密に縄文が押圧されたもの (136～138図5)

第Ⅲ層から6点、第Ⅲ a 層から1点、第Ⅲ b 層から1点、第Ⅲ c 層から7点、第Ⅱ・Ⅲ層から3点出土している。

縄文原体を、直線、曲線、渦巻状に押圧した文様を組み合わせで表現されるものが多い。

#### C類 B類に加えて馬蹄形押圧が施文されたもの (138図6～139図5)

第Ⅲ層から2点、第Ⅲ a 層から1点、第Ⅲ c 層から3点出土している。

138図6は、三角形の頭部に螺髪状の頭髪表現と推測されるものが施される。また、頭部の凹ませた部分には背面への貫通孔が施されている。耳と考えられる表現も目から斜め上に1対で2か所に環状につくられている。

#### D類 刺突がみられるもの (139図6～141図2)

第Ⅲ層から2点、第Ⅲ a 層から1点、第Ⅲ c 層から3点、第Ⅲ c - 2層から1点、第Ⅲ c - 3層から1点、第Ⅱ・Ⅲ層から2点、第Ⅱ層から1点、第Ⅱ c 層から1点出土している。

刺突のみで文様が表現されるものと、縄文押圧と組み合わせるものがみられる。

#### E類 B類に比べ縄文が疎らに押圧されたもの (141図3～142図5)

第Ⅲ層から4点、第Ⅲ a 層から2点、第Ⅲ c 層から2点、第Ⅱ・Ⅲ層から1点出土している。

F類 沈線文が施文されたもの（142図6～143図6）

第Ⅲ層から5点、第Ⅲc層から1点、第Ⅱ・Ⅲ層から3点出土している。

142図7は、A類に類似した文様構成であるが、こちらに含めた。時期はA類と同様であろう。

G類 縄文が回転施文されたもの（143図7）

第Ⅲ層から1点出土している。

143図7は体部にRL縄文が縦位に回転施文されている。

H類 無文のもの（143図8～146図9）

第Ⅲ層から8点、第Ⅲa層から1点、第Ⅲb層から2点、第Ⅲc-2層から2点、第Ⅲc-4層から2点、第Ⅲc層から5点、第Ⅱ・Ⅲ層から7点出土している。

完形のものがないため、本来的に無文であるかどうかは不明であるが、粘土の貼付以外に施文されないものを一括した。

143図9は、完形で、体部に粘土貼付で胸とへその表現が施される。

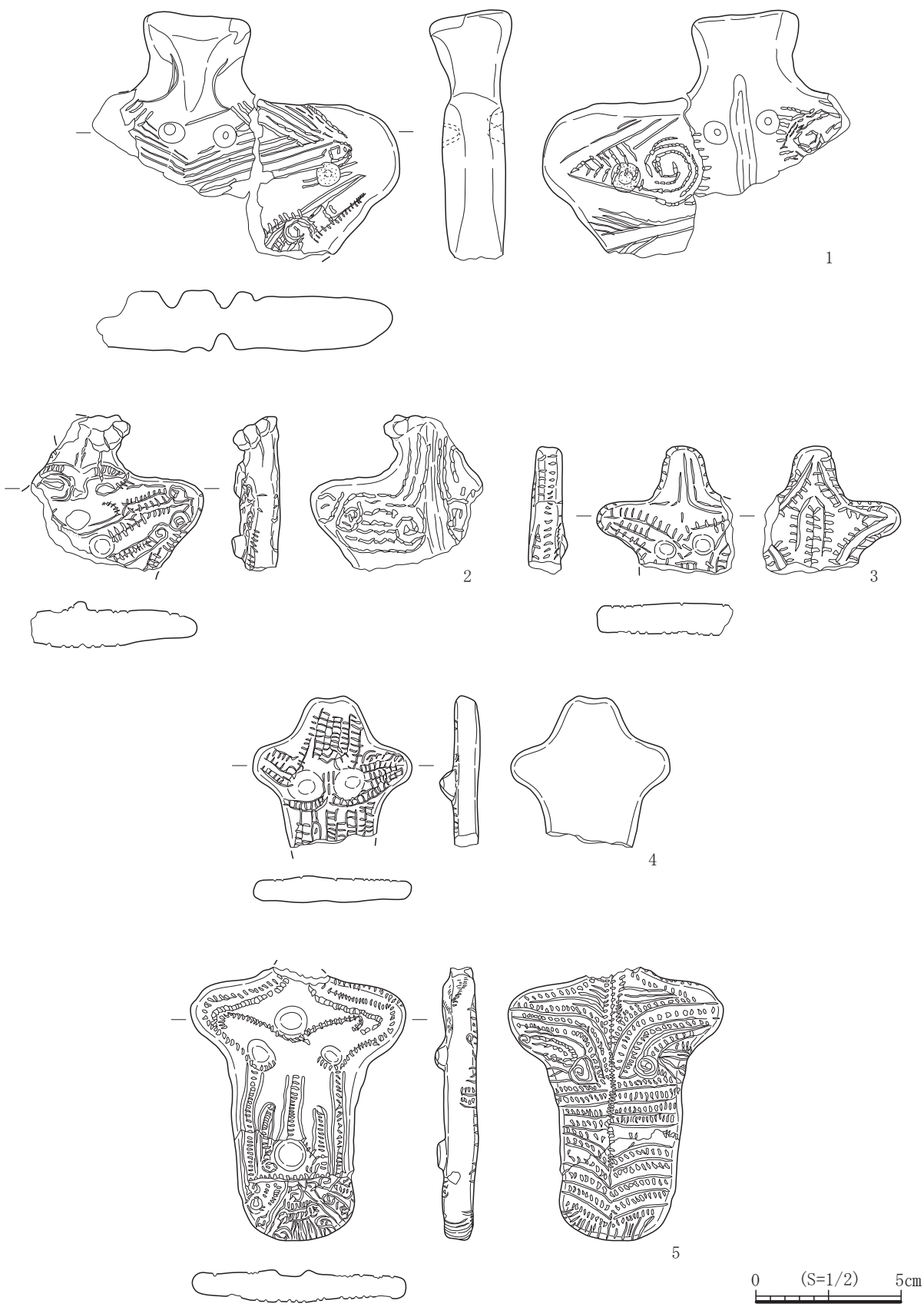
145図1は、体部の脚としたが、腕の可能性もある。土偶かどうかは明確ではない。胎土には、大量の繊維が混じっている。

I類 曲線状、渦巻状のモチーフをもつ沈線文が施文されたもの

本類に相当するものは、北の谷では出土していない。

これらの分類は、『三内丸山遺跡35』によると、土器型式との対応関係は次のようになっている。Aは（一部前期に入る可能性もあるが）円筒上層a式期、Bは円筒上層a・b式期、Cは円筒上層b式期、Dは円筒上層c式期、Eは円筒上層d式期、Fは円筒上層d・e式期、Gは円筒上層e式前後、Hは円筒上層a～e式期、Iは榎林式にそれぞれ対応する。

（岩田 安之）



134图 土偶 (1)



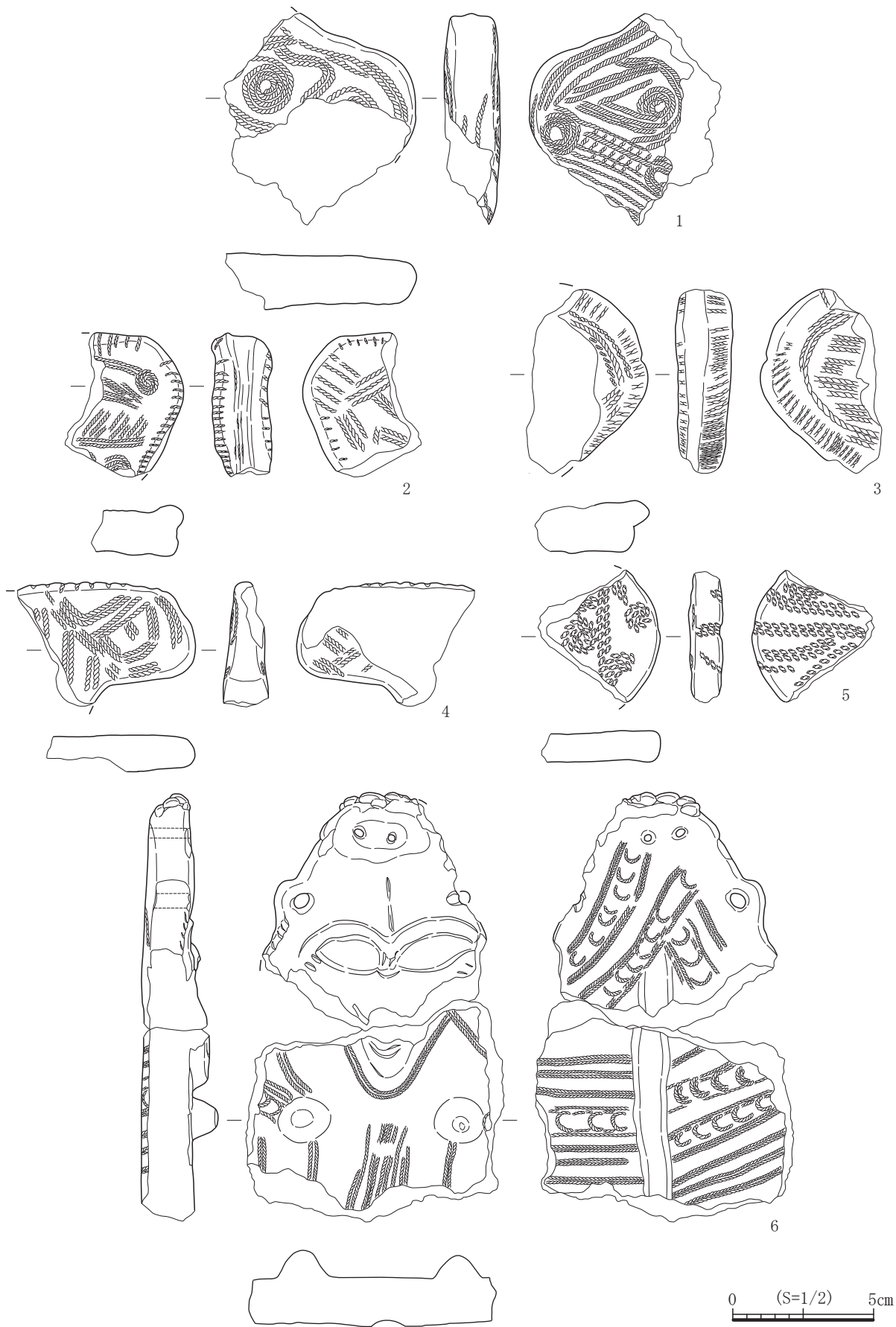
135图 土偶 (2)



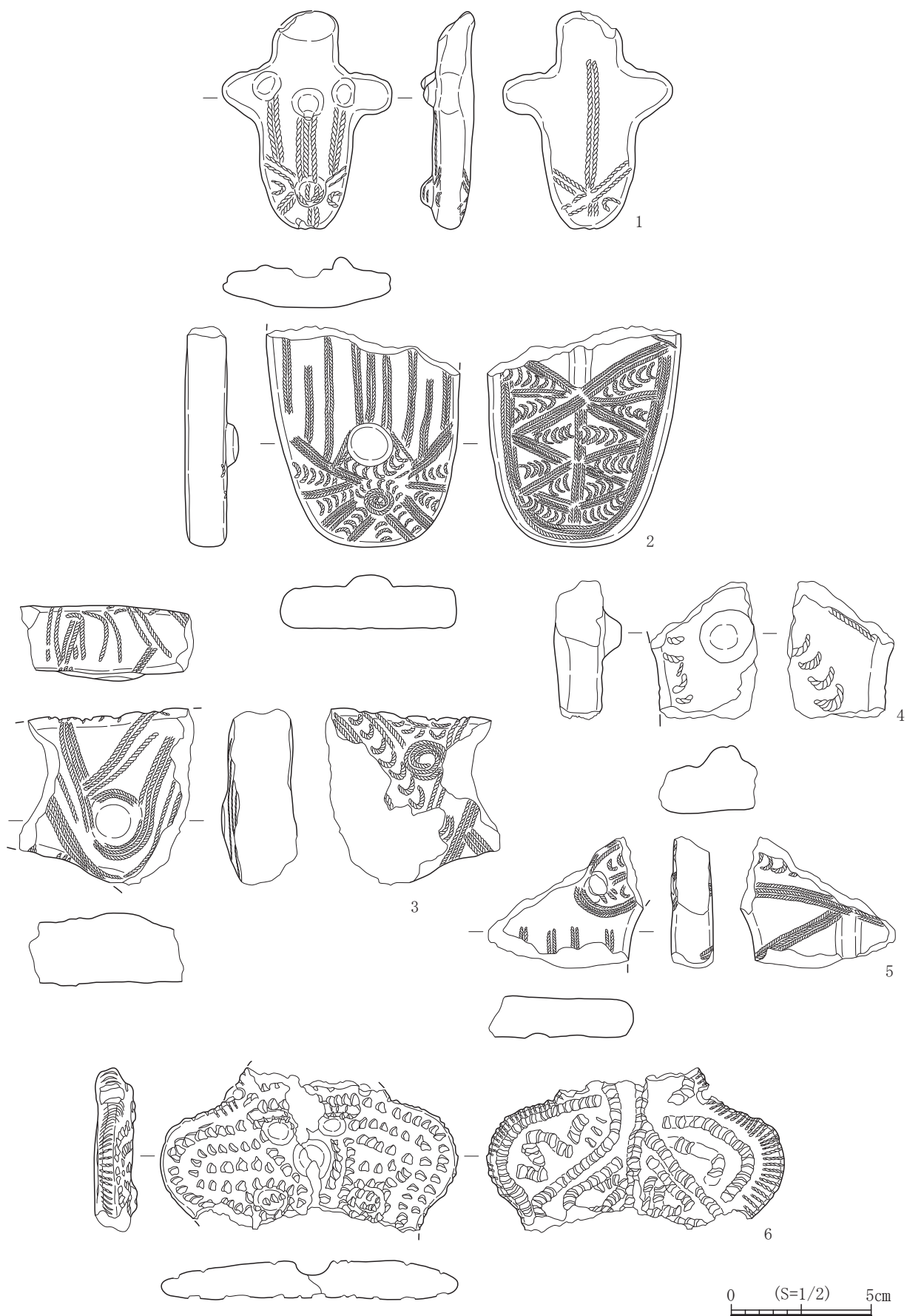
136图 土偶 (3)



137图 土偶 (4)



138图 土偶 (5)



139图 土偶 (6)